建築と社会

Architecture and Society
2007
No.1023
06
日本建築協会

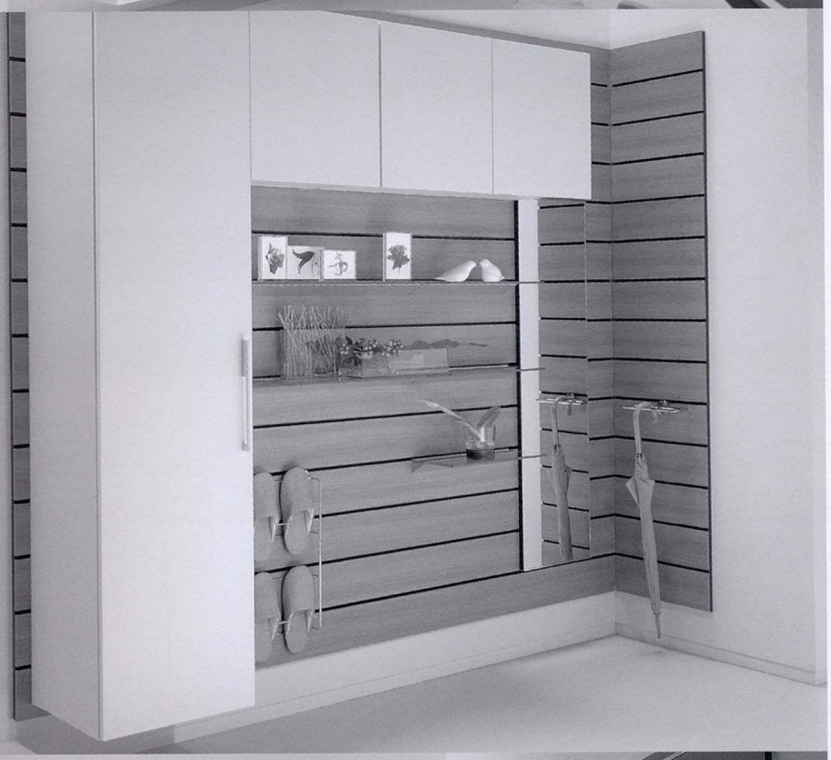
こだわりが創る
住まいのカタチ



GS type Living Room Style



HS type Entrance style



LS type Walk-In Closet Style



多彩なパーツで、
さまざまな空間の収納を
自分らしくレイアウト。

収納物を、目的に応じて美しく機能的にレイアウトするシステム収納<ファンタナ>。多彩なパーツを自由に組み合わせることで、スペースの広さ、収納物の種類やボリュームに応じた出し入れしやすい収納スタイルが創りあげられます。リビング、ウォークインクローゼット、玄関など、幅広い空間で自分らしいコーディネートをお愉しみください。

2007 New Products

funtana

UNION

建築文化を創造する
株式会社ユニオン

ITEM

[アーキズム シリーズ]

建築用ドアハンドル
ロマンテ
レバーハンドル
消火器収納ケース アルジャン
ドアストップ エッセ
ユニフリード
キャスタル＋メタルアート
ケアシステム ハンドバー
フロアシステム
サインシステム ピクト
視覚誘導点字鋲 ナビライン
都市景観 ヒューランドスケープ

[モデライズ シリーズ]

ユニアート
クロセット

[セキュリティ シリーズ]

リモコン式ドア施錠システム ケアガード
血流認証装置 ユニガード

ISO 9001 ISO 14001

www.artunion.co.jp

本社
〒550-0015
大阪市西区南堀江2-13-22

大阪支店
〒550-0015
大阪市西区南堀江2-13-22
tel 06-6532-6273
fax 06-6532-0568

東京支店
〒135-0021
東京都江東区白河2-9-5
tel 03-3630-2171
fax 03-3630-4433

名古屋営業所・ショールーム
〒454-0805
名古屋市中川区舟戸町3-20
tel 052-363-5221
fax 052-363-5255

上海事務所
Room 305, 555 Building,
555 Nanjing Road West,
Shanghai 200041 PRC
tel ＋86-21-52130430
fax ＋86-21-52130431

北京事務所
Room 1903, Dongyu Building,
A Shuguang (W)A1,
Caoyang Area Beijing 100028 PRC
tel ＋86-10-58220780
fax ＋86-10-58220779

アトリエユニオン／東京
〒103-0022
東京都中央区日本橋室町4-5-1
tel 03-3517-1818
fax 03-3517-1819

アトリエユニオン／大阪
〒550-0015
大阪市西区南堀江2-13-22
tel 06-6532-8920
fax 06-6533-0224

今年は10月号掲載で、応募締め切りが7月下旬となります!

若き創造者たちへ

「建築と社会」平成19年10月号
「第54回青年技術者特集号」へのおさそい

日本建築協会誌「建築と社会」は毎年「青年技術者特集号」を企画し、すでに53回にわたって若き優秀なプランナー、アーキテクト、エンジニアをめざす人たちを紹介してきました。

今回も、青年技術者選考委員会を設けて、青年技術者を選考いたしますが、昨今の建築に携わる技術者の多様化を考慮し、設計だけに限らず、計画、構造、設備、施工およびその他広く、建築に関連する分野から、優秀な青年技術者を募って、その不断の研究努力とすぐれた実績への情熱などを、「建築と社会」に掲載し、顕彰することにしております。

54回の企画にあたり、日常目立たない対象の実績も含めて、優秀な実績を積まれている青年技術者のみなさまのご応募をお待ちしております。

応募提出規定

1．応募される人は満35歳（平成19年７月31日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。

2．原則として、本会会員であるすいせん者を通じて応募する。

すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。

3．応募分野は特定しない。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等々その他の分野にあって、なしとげたすぐれた実績について、すいせんをうけ、下記の所要の資料を1部、本会に期日までに提出する。

4．提出された資料は「青年技術者選考委員会」にかけて選考する。（なお、提出資料は特に指示のない限り返却はいたしません）

5．「青年技術者選考委員会」において選考された青年技術者は「第54回青年技術者特集号」（平成19年10月号）に掲載するとともに、表彰式を行い、記念品を贈呈する。

6．提出資料

■すいせん用紙

請求は、すいせん依頼先担当部署、または本会事務局へ。

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

資料は、④を含めて**A3判用紙5枚以内にまとめる。**

① 設計の場合――鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料

② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）――上に準じた資料

③ 上記以外の分野の場合――それぞれの分野にふさわしい資料

④ 上記①～③のいずれかの資料の実績において、応募者本人が関与した程度、役割、立場等を明らかにし、資料中、**本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明、考え方および将来的展望などについて、2000字以内に平易簡明にまとめたもの**（必要に応じ、図・表を用いて差し支えない）。ただし応募者本人の執筆に限る。**このコンセプトは、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えているので、十分配慮されたい。**

7．**提出期限** 平成19年7月30日（月）

8．**提出先** 日本建築協会「青年技術者選考委員会」
〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階
電話 06-6946-6981 FAX. 06-6946-6984
Email：ken-sha@aaj.or.jp

9．**青年技術者選考委員会**（平成19年度）

委員長 設楽 貞樹／安井建築設計事務所常務取締役
委 員 木多 道宏／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授
瀬戸本 淳／瀬戸本淳建築研究室代表取締役
松村 孝治／東畑建築事務所取締役開発本部長
長谷川隆一／竹中工務店プロジェクト開発推進本部(西日本)本部長
西山 峰広／京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻准教授
黒木 安男／鴻池組大阪本店建築設計部長
伊藤 昌明／日建設計設備設計部門設計長
井村 隆／清水建設関西事業本部設計第四部グループ長
池田 孝夫／大成建設関西支店建築部品質管理室長
釼吉 敬／大林組本店建築生産技術部長

平成18年度から、青年技術者の公募は早めています。第54回青年技術者は、本年7月30日(月)までに応募できるよう準備をお願いします。

平成19年度 第1回通常総会開催

平成19年度第１回通常総会を、下記のとおり開催いたしますので、ご出席いただきますようお願いします。

と　き　平成19年 6 月14日（木）
午後4時から4時40分
ところ　大阪マーチャンダイズ・マートビル
地下１階 「ギャラリー」
大阪市中央区大手前1丁目7番31号

議　案　・第１号議案
平成18年度事業報告(案)の件
・第２号議案
平成18年度収支決算報告(案)の件
・第３号議案
役員選任の件

なお、開催通知は個人正会員、団体正会員あて別途送付しております。ご欠席の場合は『返信用ハガキ』にて必ず委任状の送付をお願いします。
お問い合先：(社)日本建築協会総務課
TEL.06-6946-6981

池田啓氏講演会と会員交流懇親会の開催

▼申込先
㈳日本建築協会総務課あて、下記のいずれかでお申し込みください。
TEL　06-6946-6981
FAX　06-6946-6984
Email　soumu@aaj.or.jp

来る６月14日（木）開催の日本建築協会通常総会終了後、総会出席者及び会員を対象に、下記のとおり講演会並びに会員交流懇親会を開催いたしますので、多数のご参加をお願いします。

■池田啓氏講演会

池田啓氏は、兵庫県立大学教授、兵庫県立コウノトリの郷公園研究部長。動物生態学、保全生物学の研究者であり、また、コウノトリの野生復帰事業を推進しておられます。いわば、Thinkだけでなく、実践―Act―する人ということができます。
おそらく、動物にとって住みよい環境とは、人間にとって暮らしやすい環境であるはずです。池田氏にお話をいただきながら、地域創造に必要な条件とは何かを皆で考える場としましょう。

演　題　「地域の中で自然を保全する―ThinkもActもローカルで」
講　師　池田　啓氏
と　き　2007年 6 月14日（木）
16：50～17：50
ところ　大阪マーチャンダイズ・マートビル　地下１階　ギャラリー
大阪市中央区大手前1-7-31
定　員　100人（参加費無料）
申込み　先着順

■会員交流懇親会

会員相互の情報交換、交流、親交を深めるため会員交流懇親会を開催。

と　き　2007年 6 月14日（木）
18：00～19：45
（講演会に引き続き開催）
ところ　東天紅（大阪マーチャンダイズ・マートビル　20階）
会　費　5000円（当日徴収）
事前にお支払いいただく場合は下記口座へ。
郵便振替口座 00910-9-39975
口座名義 社団法人日本建築協会



■池田啓（いけだひろし）氏プロフィール

●1950年山口県生まれ
1973年九州大学理学部生物学科卒業
1979年九州大学大学院理学研究科博士課程修了、理学博士。
ニホンザルの食性と行動域の関係、タヌキの社会生態学をもとにしたイヌ科の社会進化、アフリカで有蹄類および食肉類の研究を行う。
1984年文化庁文化財調査官。天然記念物の指定や保護を担当。
1999年より現職。コウノトリの野生復帰事業を推進する。
専門分野は動物生態学、保全生物学。

●所属学会
日本生態学会、日本哺乳類学会、日本動物行動学会、日本霊長類学会、野生生物保護学会、日本アフリカ学会、生き物文化誌学会、日本エコミュージアム研究会

●主な著書
『但馬のこうのとり』（共著）、但馬文化協会(2006).『コウノトリ再び空へ』（分担）、神戸新聞総合出版センター(2006).『自然再生』（分担）、ソフトサイエンス社（2005).『生態学からみた野生生物の保護と法律』（分担）、講談社サイエンティフィク（2003).『週刊日本の天然記念物』（総監修）、小学館（2002).『哺乳類の生態学』（共著）、東京大学出版会（1997）ほか

講演会・懇親会FAX申込書（きりとり）

1．申込区分（○印をお願いします）
①講演会のみ参加　②懇親会のみ参加　③講演会・懇親会の両方参加

2．６月14日の通常総会出席予定（○印をお願いします）
①出席予定　②欠席予定　③未定
（総会開催通知は５月下旬に各会員あて別途送付いたします）

3．懇親会会費の事前振込（○印をお願いします）
①あり　②なし

申込者氏名	
ご連絡先	（職場・自宅）
ご連絡先TEL	

平成19年度

日本建築協会委員

平成19年4月25日開催の常任理事会において、下記のとおり各委員会委員を委嘱しました。

（敬称略　◎印委員長　○印副委員長　△印幹事　☆顧問　　職場名は略称を用いました）

■編集委員会

会誌「建築と社会」の企画・編集

◎設楽　貞樹／安井建築設計事務所

■特集小委員会

計画分科会

（計画系）

飯田　　匡／大阪大学大学院
鈴木　克彦／京都工芸繊維大学大学院
田中　直人／摂南大学
辻　　武之／阪急不動産
藤原光博／大阪市計画調整局
紅谷　昇平／人と防災未来センター
松田奈緒子／京都工芸繊維大学大学院生
△三宅　次郎／阪神電気鉄道
守井　　辰／日建設計
吉村　英祐／大阪工業大学
（未定）　／竹中工務店

（建築計画系）

安部　新二／大建設計
△荒木　宏之／大成建設
江副　敏史／日建設計
奥村　朋孝／鴻池組
菅野　忠司／鹿島建設
神戸　嘉也／大林組
木多　彩子／摂南大学
楠　　敦士／安井建築設計事務所
小林　優子／日建ハウジングシステム
所　　千夏／アトリエCK
野田　隆史／竹中工務店
枇杷　健一／枇杷健一建築設計室
松森　織江／東畑建築事務所

（インテリア・住宅系）

阿部　泰浩／都市再生機構西日本支社
加藤　　力／宝塚造形芸術大学
神谷　浩司／大林組
黒柳　　亮／竹中工務店
高野　直樹／安井建築設計事務所
田中　浩介／積水ハウス
戸井賢一郎／日建スペースデザイン
ペリー史子／大阪産業大学
本山　　仁／松下電工

構造分科会

秋田　　智／安井建築設計事務所
岸本　光平／竹中工務店
瀧野　敦夫／大阪大学大学院
鶴田　　潤／日建設計
中塚　光一／大林組
難波　　尚／神戸大学
房安　智也／北條建築構造研究所
松村　　健／東畑建築事務所
向井　洋一／奈良女子大学
矢野　勇二／ZEN建築構造事務所
安野　　郷／鴻池組

設備分科会

△赤澤　正治／竹中工務店
石井　勝秋／大阪市都市整備局
梶井　宏修／近畿大学
河井　康人／関西大学
近藤　国夫／きんでん
谷野　太志／新菱冷熱工業
夏井　重行／元・富士ネオ工業
福谷　　周／安井建築設計事務所
桝井　貴廣／総合設備コンサルタント
村上幸三郎／村上デザイン事務所
山下　　修／大阪市都市整備局

施工材料分科会

桜井　和男／竹中工務店
平田　茂良／大和ハウス工業
△藤丸　啓一／清水建設
松元　秀樹／鹿島建設
山岡　篤人／大林組
吉田　正友／日本建築総合試験所

法令分科会

赤井　英稔／京都府建築指導課
伊賀　　誠／兵庫県建築指導課
△片岡　正和／大阪市建築指導部
金本　忠義／神戸市建築指導部
谷本　和子／堺市建築都市局指導監察課
中迫　悟志／大阪府建築指導室
文山　達昭／京都市建築指導部

■作品作風小委員会

石塚なぎさ／大阪府住宅まちづくり部
居内　章夫／徳岡昌克建築設計事務所
○井上　雅祐／大林組
稲垣　和江／イナガキ ケンチク ケンキュウショ
池上　　明／エーアイ アーキテクト スタジオ
岩佐　　進／東畑建築事務所
加嶋　章博／摂南大学
倉渕奈千子／田中啓文総合建築研究所
澤田　純一／兵庫県県土整備部
戸川　勝之／安井建築設計事務所
鞆野　淳司／竹中工務店
豊田　充広／高松建設
西田　佳代／日建設計
芳谷　晴彦／清水建設
増田　敬彦／増田敬彦一級建築士事務所
山田　俊紀／昭和設計

■広告企画小委員会

荒木　俊明／鴻池組
今井　成年／竹中工務店
大竹　賢次／大成建設
○虎谷　伸幸／大林組
○前田　　衛／日建設計
南澤　浩司／清水建設
森川　幸信／安井建築設計事務所

■10年委員会

赤木　　隆／日建設計
川上比奈子／夙川学院短期大学
中村　文紀／東畑建築事務所
○前川　治彦／前川治彦建築研究所

■事業委員会

見学・講演・説明・展示・懇親会などの企画および実施

◎瀬戸川　葆／関西住宅品質保証
○原見　昌志／元・安井建築設計事務所
○南　　次郎／元・淺沼組

■情報見学小委員会

△伊藤　　博／元・松村組
△大喜多孝哉／大林組
△中西　　稔／ジェイアール西日本コンサルタンツ
△森田　芳次／安井建築設計事務所
石井　太志／昭和設計
岩下　　智／鴻池組
岡本　　隆／日建設計
河合　哲夫／竹中工務店
越水　博明／清水建設
雑賀　俊至／きんでん
佐々木　栄／昭和設計
田﨑　祐生／大阪成蹊大学
樋上　新治／ラシンプランニング
福島　　隆／鹿島建設
三浦　　憲／大林組
米井　　寛／東畑建築事務所

■出版委員会

建築に関する図書の企画・編集・刊行、ならびに講座の企画・実施

◎上原　正行／U建築工房
井上まるみ／住まいの研究室
植村　典人／修成建設専門学校
河田　康夫／竹中工務店
神田　暢子／神田建築工房
田中　正司／鹿島建設
玉水　新吾／エス・バイ・エル
谷川　康信／大阪工業技術専門学校
○中川　　徹／清水建設
峯松　秀吾／マイン企画
☆山田　　修／修建築事務所

■教育委員会

建築教育についての調査・研究、講習会の企画・実施、ならびに工高生デザインコンクールなどの企画および実施

◎山形　政昭／大阪芸術大学

■講習会小委員会

○有光　利治／鹿島建設
河野　浩司／竹中工務店
阪井　　聡／大林組
白塚　芳郎／鴻池組
平野　　剛／鹿島建設
水野　貴夫／清水建設
森　　瑞生／大成建設
山内　博記／淺沼組

■工高生教育小委員会

○和田　康由／大阪市立都島第二工業高校
△植松　清志／大阪人間科学大学
宇都　直人／大阪市立都島工業高校
大西　正宜／大阪府立西野田工業高校
岡本　展好／大阪市立都島工業高校
小池　啓夫／日建設計
神野　　茂／堺市立工業高校
武田　雄二／愛知産業大学
出雄　　隆／大阪市立工芸高校
永島　敏郎／安井建築設計事務所
山岡　　徹／堺市立工業高校
吉井　和男／東畑建築事務所

■建材委員会

建材コンサルタント・新建材の紹介

◎松原　徹雄／日本建築総合試験所
上原　優一／清水建設
河津　龍大／日本建築総合試験所
菅　　知史／鹿島建設
阪本　重信／大成建設
新谷　英夫／奥村組
田邊　　昭／都市再生機構西日本支社
徳山　正司／錢高組
西出　　浩／大建設計
松田　俊幸／大林組
松本　　章／東畑建築事務所
森川　　務／竹中工務店
安江　　広／日建設計
☆和田　克朗／元・日本建築センター



A4判・240頁・並製本

「日本建築協会80年史1917-1996」

増刷頒布中　頒価　3,000円

1999年７月に発刊した「日本建築協会80年史1917-1996」は、各方面から好評をいただいておりますが、このたび、皆様の強いご要望により、増刷・頒布することにいたしました。大正６年３月30日に関西建築協会として誕生した日本建築協会の80年の歴史を、様々な事業や委員会活動を通じて、また、本会設立者の片岡安、武田五一以降現在までの会員たちの社会活動を通して知ることができる記念誌として、A4判・240頁にまとめています。

とくに、協会草創期の大正・昭和初期の片岡安ら協会のメンバーと当時の大阪市長・関　一との交流を物語る一文は、大阪の都市計画史、あるいは関西の建築人物誌ともなっています。本会の歴史を知るだけでなく、建築を通して、それぞれの時代の雰囲気を身近に感じることができる大変貴重な資料となるものです。

購入ご希望のかたは、下記要領でお申し込み下さい。

＊

申 込 先　社団法人 日本建築協会
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階B室
TEL 06-6946-6981　FAX 06-6946-6984

頒　　価　１部3,000円(税・送料込み)

※増刷部数には限りがございますので、お早めにお申し込み下さい。

「日本建築協会80年史」

●日本建築協会の沿革／委員会活動／「建築と社会」の変遷／大正時代から現在までの本会主催の博覧会・展覧会・講演会／よろず相談住宅展／青年建築家・青年技術者顕彰／工高生デザインコンクール入選者etc.

●日本建築協会創立者と会を支えた38人のプロフィール（片岡　安・設楽貞雄・武田五一・池田　實・波江悌夫・竹腰健造・尾崎久助・東畑謙三・塚本猛次・福田朝生・佐野正一・葛野壮一郎・横濱　勉・松本禹象・宗　兵蔵・園部文雄・日高　胖・野村一郎・古宇田　實・松室重光・松井貴太郎・安井武雄・中澤誠一郎・坂　静雄・今林彦太郎・井上新二・松本儀八・池田宮彦・銭高輝之・中西六郎・大林芳郎・鴻池藤一・伊東五郎・竹中錬一・鷲尾健三・松村雄吉・横尾義貫・足立　孝）

●座談会「戦中から戦後初期の協会活動」―尾亀清四郎・大林芳郎・小西　岬・佐野正一・横尾義貫・三品哲夫の6氏による終戦前後の協会活動の証言―

＊

■執筆ワーキンググループ
坂本勝比古／安達英俊／石田潤一郎／植松清志／梅宮弘光／桐浴邦夫／酒井一光／橋寺知子／山形政昭／吉田高子／和田康由

■80年史編纂委員会
長谷部朔郎／安達英俊／近藤達夫／谷淳之介／十倉　毅／原見昌志／和田康由／吉田悦二



「日本建築協会の遺産と功績」（坂本勝比古）より



「草創期の人々」より片岡安の項

建築と社会

Architecture and Society
2007
No.1023
06
日本建築協会

■特集予告
7月号／住まいの設備と空間の移り変わり
8月号／建築系雑誌が伝えるもの
9月号／建築基準法等改正
10月号／第54回青年技術者

編集委員会（平成19年度）

■副会長
井上　豊
中井　進
■編集担当理事
上原　正行
岡田　聿之
木戸　徹
佐藤　栄一
佐藤友美子
◎設楽　貞樹
竹中　統一
立成　良三
吉村　英祐
■特集小委員会
■計画分科会
★計画系
飯田　匡
鈴木　克彦
田中　直人
辻　武之
藤原　光博
紅谷　昇平
松田奈緒子
△三宅　次郎
守井　辰
吉村　英祐
★建築計画系
安部　新二
△荒木　宏之
江副　敏史
奥村　朋孝
菅野　忠司
神戸　嘉也
木多　彩子
楠　敦士
小林　優子
所　千夏
野田　隆史
桃杷　健一
松森　織江
★インテリア・住宅系
阿部　泰浩
加藤　力
神谷　浩司
黒柳　亮
高野　直樹
田中　浩介
戸井賢一郎
ペリー史子
本山　仁
■構造分科会
秋田　智
岸本　光平
瀧野　敦夫
鶴田　潤
中塚　光一
難波　尚
房安　智也
松村　健
向井　洋一
矢野　勇二
安野　郷
■設備分科会
△赤澤　正治
石井　勝秋
梶井　宏修
河井　康人
近藤　国夫
谷野　太志
夏井　重行
福谷　周
桝井　貴廣
村上幸三郎
山下　修
■施工材料分科会
桜井　和男
平田　茂良
△藤丸　啓一
松元　秀樹
山岡　篤人
吉田　正友
■法令分科会
赤井　英稔
伊賀　誠
△片岡　正和
金本　忠義
谷本　和子
中迫　悟志
文山　達昭
■作品作風小委員会
石塚なぎさ
居内　章夫
○井上　雅祐
稲垣　和江
池上　明
岩佐　進
加嶋　章博
倉渕奈千子
澤田　純一
戸川　勝之
鞆野　淳司
西田　佳代
芳谷　晴彦
増田　敬彦
山田　俊紀
■広告企画小委員会
荒木　俊明
今井　成年
大竹　賢次
○虎谷　伸幸
○前田　衛
南澤　浩司
森川　幸信
■10年委員会
赤木　隆
川上比奈子
中村　文紀
○前川　治彦

◎委員長　○副委員長　△幹事

印　刷　2007年5月25日
発　行　2007年6月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電　話　06-6946-6981
振替口座　00910-9-39975
印刷所　㈱NPCコーポレーション
定　価　1200円〔税込〕

Journal of the Arghitectural Association of Japan

特集　こだわりが創る住まいのカタチ

総論　地域、歴史と「つながりの豊かな」住まい●西村一朗 —— 12

各論　「施主」と「私」のあいだ●佐々木恵子 —— 16

シングル女性が家を建てる、ということ●牛窪　恵 —— 18

都市居住とSOHO空間
—都市型賃貸集合住宅の事例から—●田中啓文 —— 20

塔の家に暮らして●東　利恵 —— 23

子どもの考えるこだわりのインテリア
—部屋のモデル制作実験より—●片山勢津子 —— 25

伝統をみつめていたら、普通の家が見えてきた●宮本繁雄 —— 27

会告　若き創造者たちへ—「第54回青年技術者特集号」へのおさそい．平成19年度第1回通常総会開催．池田啓氏講演会と会員交流懇親会の開催．平成19年度日本建築協会委員会． 1

作品作風　イオン神戸北ショッピングセンター 6

研究の風景　石井　敏研究室（東北工業大学工学部建築学科） 8

GAllery　ステンドグラスとの出会い（小森淳一）●戸川勝之 10

法令コーナー　建築基準法の改正●谷本和子 30

設備の頁　CASBEE—大阪市の誘導の狙いは—●薄木三男 31

information　「見果てぬ夢—日本近代画家の絶筆」展．企画展「松園が学んだ三人の師」．Art Court Frontier 2007 #5．バードハウス展．第21回「大阪市ハウジングデザイン賞」推薦募集．平成19年度建設リサイクル法説明会（第1回）．病院建築基礎講座/福祉建築基礎講座．第56回アイカ現代建築セミナー．「＜旧乾邸＞活用応援倶楽部」．ミュージアム見学会． 32

月間の動き　平成19年4月分 34

表紙　企画・デザイン　高橋 善丸





作品
作風

設計・監理■
竹中工務店

施工■
竹中工務店

イオン神戸北
ショッピングセンター

計画地は神戸市北区にあり、これから開発が始まる地区にいち早く計画・建設されたショッピングセンターである。今後住宅地として成長していく街のなかで、このショッピングセンターが購買・消費機能以上の活気と賑わいを街にもたらし、地域の中心施設として人々に親しまれることを目指した。

円弧を描きながら３層にわたって吹き抜けるモールは、施設の主動線であると同時に、お客様がモール沿いの専門店の水平の連続と垂直の積層を立体的に感じる場所でもあり、人々の視線の交錯や動きによる一種の都会的な賑わいを演出する空間となっている。施設の中央部では、共用部外壁にカーテンウォールを設け、内部に開放性と明るさをもたらすと同時に、外部の街に対しても内部の賑わいと活気を映し出そうとした。

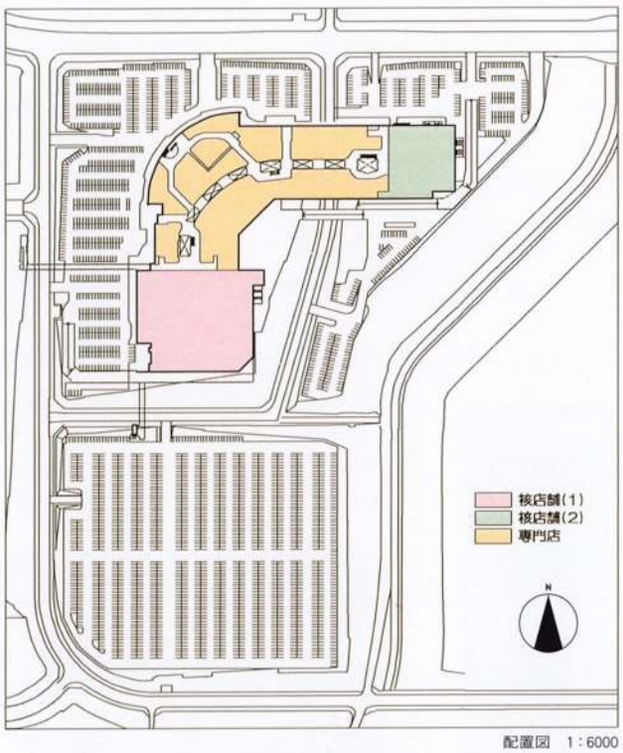
また、性能設計を適用した合理的階段配置による売り場環境の改善と安全性の確保や、建物や外構を積極的に緑化することによる環境負荷の低減を行い、「快適」「安全」「環境」といった商業施設の基本的な課題にも応える計画とした。

（山田義浩、福垣哲朗、鬼崎昌人、瀬山充博、伊藤　剛/竹中工務店）

所 在 地 ――神戸北区上津台８丁目1-1、1-2、2-1、53、54
敷地面積 ――114,622.49㎡
建築面積 ――　34,720.01㎡
延床面積 ――136,130.68㎡
構造規模 ――SRC、F5・P1
工　　期 ――2006年３月～2006年11月
最 寄 駅 ――神戸電鉄新鉄道場駅
撮　　影 ――古川泰造




AEON
PICNIC COURT
AEON
RESTAURANT


核店舗(1)
核店舗(2)
専門店
N

配置図　1：6000


AEON
Na-葉-Na

研究の風景

東北工業大学
工学部建築学科

石井　敏 研究室

■はじめに

東北工業大学工学部建築学科は、建築学を総合的に学ぶ教育環境と設備環境に恵まれており、現在は構造・材料・環境・歴史・デザイン・計画各分野にわたって16の研究室から構成されています。１学年180名近くが在籍するマンモス学科ですが、可能な限り個々の興味を引き出し、それぞれの個性を伸ばしながら、社会に貢献できる技術者育成を目指して教育にあたっています。大学院も設置されていて博士課程まであります。

当研究室は計画系研究室のひとつで、施設計画研究が主なテーマです。特に、人とその人が暮らす環境との関わりに着目しながら、「高齢者施設や高齢者の居住環境に関する研究」を行っています。「建物の計画・設計につながる重要な情報は現場（フィールド）の中にある」を合い言葉にして、高齢者施設におけるフィールドワークを中心に研究活動を行っています。建築は建物単体で成立しているわけではありません。高齢者施設であれば、そこに暮らすお年寄り、介護スタッフ、家族、そしてそれらを包み込む空間すべてがひとつになってはじめて建築として成立しています。そのことをもっともリアルに見せてくれるのが現場ですから、その現場から学びとってもらいたいと考えてさまざまな活動を行っています。現在、４年生が12名在籍し、大学院の修士課程に１名、博士課程にはペルーからの国費留学生が１名在籍しています。３年生の後期から研究室配属となるため、９月にはさらに３年生が10数名在籍することになります（写真１）。

■「やわらかい」建築

工業大学の建築ということもあり、少々「堅い」イメージもありますが、建築計画系のいくつかの講義をとおして、いかに建築が社会や人、そしてその暮らしとつながっているか、さらには文化や歴史、その国の制度とつながっているかということを伝えています。そのかいあってか、建築の「やわらかい」部分、各種学問との境界領域的な部分に興味を持って当研究室への所属を希望してくれる学生が多くいます。

研究室の研究テーマに多少なりとも興味を持っていることはもちろんですが、何より建築が好きなこと、どんなことにも興味を持って貪欲に探求する意欲的な学生を受け入れるようにしています。卒業研究もしくは卒業設計いずれか選択で取り組むのですが、この何年かは当研究室志望の学生は研究に興味を持つ学生が多い状況が続いています。

■３年生の活動・模型づくり

さて、３年生後期で研究室に配属されると、毎週ゼミが行われます。ゼミでは高齢者施設についての基礎的な勉強もしますが、３年生から専門的な勉強に入り込むよりも、むしろその時期はまだ「建築」そのものを楽しむことの方が大切だと考え、ここ何年かは有名住宅建築の模型づくりを行わせています。

２つのグループに分けて行うのですが、模型の型となる各種図面の入手から、それぞれの住宅の勉強などグループ単位で作業を進めさせます。数ヶ月かけて、スケジュールを立ててのグループ作業を通じて、グループの仲間意識の醸成、グループ同士の対抗意識、さらには研究室メンバー間の活発なコミュニケーションの誘発など、とてもよい効果があります。講義の合間、夜など集まっては作業を進めていきます（写真２）。

昨年度はコルビュジエのサヴォア邸とリートフェルトのシュローダー邸の２つに取り組んでもらいました（写真３）。完成模型は、せんだいメディアテークで行われる卒業制作展・課題作品展で展示したり、大学のオープンキャンパスでの学科紹介・研究室紹介などで展示したりします。学生にとっても、自分たちが制作した模型が外部の人の目に触れることは大きな刺激となるようです（写真４）。


写真１　研究室旅行にて（昨年度：他大学と合同で。後列右端が筆者）


写真２　模型作成風景

■調査研究の準備

さて、４年生になると高齢者施設での計画研究を進めるにあたっての準備を始めます。書籍や論文を通しての勉強も大事ですが、何より施設とその中での暮らしの姿を見て、肌で感じること、自分の目で確かめることが、後々調査を実施するにあたってもとても大きな力になります。

したがって、近隣にある高齢者施設に足を運んで見学するような機会を可能な限り設けるようにしています（写真５）。新しい施設から古い施設まで、さまざまな状況を目の当たりにすることで、いろいろな問題意識も芽生えてきます。出来るだけ早い時期に調査を始めたいところなのですが、学生の就職活動が夏休みまで続きますので、なかなかまとまった時間を取って、調査に向かうことが出来ません。気付くと調査を開始するのは夏も終わりにさしかかってからとなってしまいます。しかしそれまでの時間が、目には見えない力を蓄える時間となっているのではないか…とも思っています。

■調査研究を通しての社会経験

４年の夏には研究室旅行も行っています（写真１）。近隣県の先進的な高齢者施設を訪問し、設計者や運営者にいろいろな話をじっくりと伺う機会としています。ここ数年は秋田県の高齢者施設を訪問させていただいています。施設見学のあと、近くの温泉で、設計


写真３　完成した模型を前に


写真４　学科紹介コーナーで誇らしげに


写真６　施設でのボランティア


写真８　フィールドでの体験

者や町の方と飲み語らうことが恒例となっています。

夏休みが終わると調査が本格的に始動します。経験のない中、とにかく半年間で論文を書かなければならないというのは、きわめて大変な作業です。卒業論文だからといって、手を抜くことは絶対にさせません。外部で発表しても恥ずかしくないだけの質と量、内容を備えた調査研究をさせるように心がけ、論文を書かせるようにしています。そのことが大学生活の大きな思い出になるだろうし、何より社会に出てからも大きな力になるであろうと信じてやらせています。

研究・論文指導が出来る院生が多くいる大学とは異なり、調査の企画から、実施、データの集計、分析、論文執筆の指導まで一人何役もこなす必要があります。大変ですが、そのなかで学生一人ひとりと関わり合いながら、こちらも一緒に苦しむことが出来る時間を毎年持てるというのも、考えようによってはよいことかもしれません。

しかし、何から何までこちらでやってしまったのでは、こちらも身が持ちませんし、学生のためにもなりません。どのような調査でも、最初のアレンジだけこちらで行い、その後の調査の具体的実施にむけての施設側との打ち合わせなどは、出来る限り学生自身に行わせます。電話でのやりとりやアポイントメントをとって伺っての打ち合わせ、調査時の職員との対応、調査後のお礼や論文完成後や卒業の報告などを通して、自然と社会経験を積むことになり、マナーなども身に付いていきます。調査でお世話になる施設でボランティアに参加させたりもします（写真６）。

多くが学部を卒業して社会に出る当研究室の学生たちにとっては、「研究論文を書く」ということ以上に、研究を通して得られる社会経験が、何よりも貴重なものではないかと思いますし、それができるのも建築計画の研究のよいところかと思っています。

■フィールド調査から得られること

典型的なフィールド調査は、例えば朝から晩まで一日（時には何日も連続で、また時には夜間時も）施設に滞在し、施設の暮らしを追い、記述していくという手法です。お年寄り一人ひとりがどのような暮らしをしているのか、どのような場所で、どのような行動をしているのか、介護スタッフはどのような動きをして、どのような介護をしているのか。さらにその生活を支えている空間はどのようなものなのか。できる限り丁寧に、観察される状況を平面図上に記録していきます（写真７）。ビデオなどで撮って、後に分析する方法もありますが、やはり「その時、その瞬間」の場面が持つ意味、その雰囲気など、生きた時間と空間の中でしか味わえないことも多くあります（写真８）。

このような調査を重ねていくうちに、いかに空間や生活環境が人々の暮らしや、それを支える介護に影響を及ぼしているのかということが自然と見えてくるようになります。暮らしの一場面一場面を見ていく中で、個々の暮らしの姿やその形、さらにはその人の過去の生き様まで断片的にでも見えてきます。「施設とはね…施設の暮らしとはね…」と、いくら口で言っても、教科書で学ばせても学生は全くイメージできませんし伝わりません。やはり現場しかないのです。

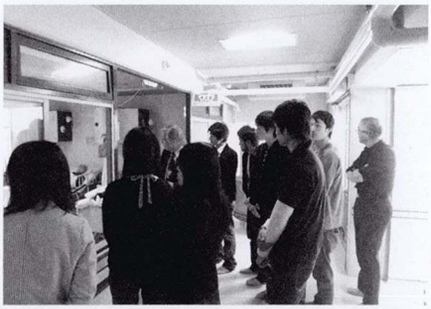
そこで得られた客観的なデータを、どのような視点で分析していくか。客観的な論述が求められる研究論文ですが、このような研究では、きわめて主観的な判断と感性が求められます。同じ行動場面を見ても、それをどのような意味としてとらえるのかは、観察者・分析者の視点、経験、感性にかかっていると言っても過言ではないでしょう。だからこそ、常日頃、さまざまな物事に対して「感じること」、「考えること」の力を磨かせることに力を入れたいと思い、やっています。

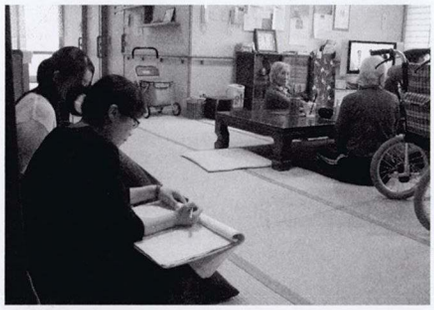
■おわりに

さて、研究室の雰囲気は伝わりましたでしょうか。学生の多くは、最初は「高齢者＝福祉＝バリアフリー（手すりを付けたり段差をなくしたり）」ということに興味をもっています。もちろんバリアフリーも大切ですが、学生には、そこに暮らす人の動きや生活を広い視点でとらえ、理解した上で部屋の広さやその配置、家具の配置やそのデザインなどの空間づくりに興味を広げ、さらにその空間をとりまく人のつながりや文化・社会制度などを含めた、広い意味での環境づくりに興味を持ち、考えるようになってほしいと思っています。

建物は何十年も残るものです。建築とは今の暮らしを支えるものであると同時に、将来の生活を支える場ともなるわけです。研究室で経験したこと、学び身につけたことが、将来、さまざまな形で「建築」に携わる学生にとって、貴重な経験になればと願っています。最後に過去２年間の研究室の卒業論文のタイトルを記して終わりにいたします。

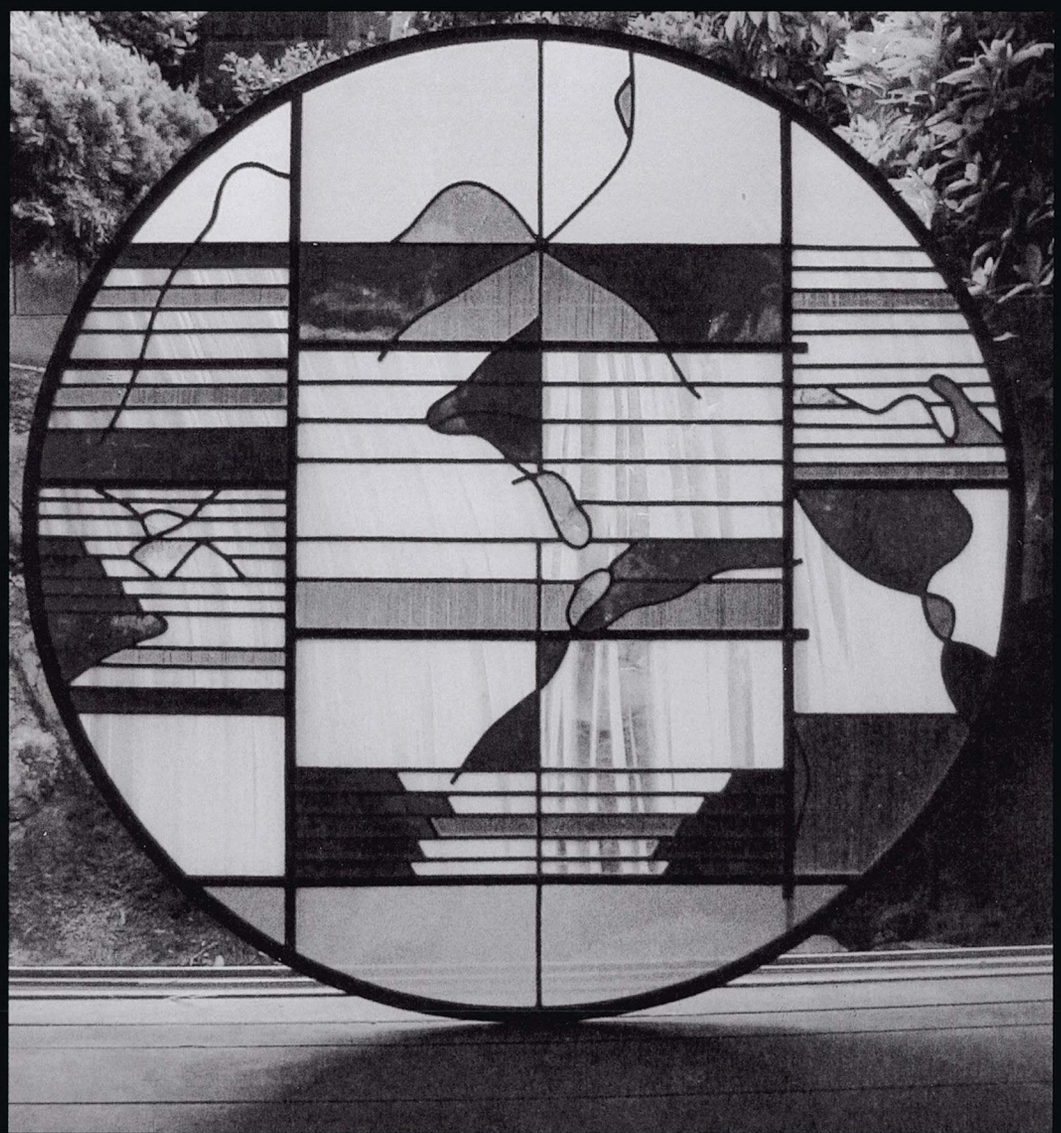
・高齢者専用賃貸住宅の居住実態に関する研究
・認知症高齢者グループホームにおける入居者とスタッフのかかわりの様態に関する研究
・ユニット型特別養護老人ホームにおける夜勤スタッフの介護様態に関する考察
・ユニット型介護老人保健施設における生活と介護の様態に関する研究
・地域開放された共用空間の使われ方に関する研究－複合型高齢者福祉施設における事例考察－
・地方農村地域における要介護高齢者の実態と介護施設の利用に関する考察
・高齢者福祉施設における参加型の計画・設計プロセスに関する研究
・高齢者介護施設の地域施設としての成立の可能性に関する事例考察
・ユニットケア型特別養護老人ホームにおける生活と介護に関する研究－利用者とスタッフのかかわりからみた考察－


写真５　施設見学の風景


写真７　観察調査の風景

ステンドグラスとの出会い

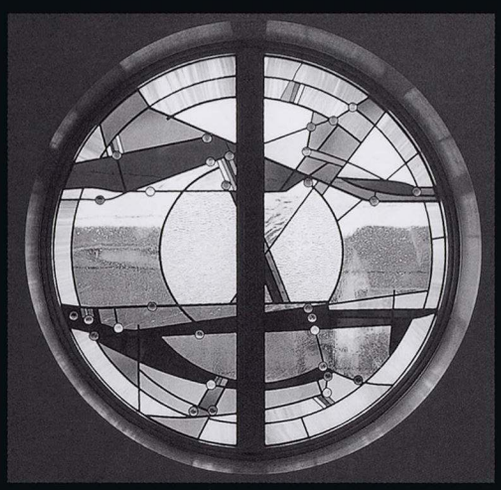
ステンドグラス　アーティザン
ジャックス　ステンドグラス　主宰
小森 淳一 Komori Jun-ichi



アラスカ州に５年間滞在していた時の事です。広大な真冬の原野をドライブ中に道に迷い困っているときれいな明かりの一軒家が目に入りました。道を尋ねようと立ち寄ってみると窓一面にステンドグラスが入っていました。アメリカですから見知らぬ人が夜敷地に入った場合危険なので躊躇しましたが、手を広げて入っていきました。そのステンドグラスは私の持っていた印象とはかなり違う、落ち着いた色彩で抽象的デザインでした。真っ白なアラスカの原野での印象は強烈で、制作者を訪ねることにしました。その人はアンカレジ市の外れに住み、主に本土から注文を受けて数多くの作品を制作していました。早速教えてもらいその後工房に入り浸ることとなりました。当時の私の仕事は夏だけで冬はほとんど休みのようなものだったのです。当時は仕事にする気は無かったのですが、帰国後本職となり現在に至っています。その工房で学んだことは先ず作品自体が設計者の意図に反して主張し過ぎない事でした。

教会に代表されるように、以前はステンドグラスはガラスに描いた絵画の様で、ガラスの持つ質感透明感が生かされていないという反省により様々な運動が起こりました。現在では宙吹き技法による所謂アンティークグラスやハンドロールグラス等に代表される美しいガラスが豊富に（輸入されているだけで約2000種類）入手でき、それにともないデザインも建物に合った作品が見られるようになってきました。







アルカス佐世保のステンドグラス

1948年　北海道十勝生まれ
1972年　早稲田大学法学部卒業
1978年　渡米
1983年　帰国　工房設立
2005年　福岡県糸島郡志摩町芥屋に移転

企画編集　戸川勝之（作品作風小委員会）

特集

こだわりが創る住まいのカタチ

地域にこだわり、そこに住むことにこだわり、住む器にこだわり、どう住まうかにこだわる。箱ありき、空間に合わせた暮らしをするのではなく、こだわりから、住まいのカタチを創りあげる。そんな住まい方を求めている人々とその暮らしを、本特集では追ってみました。

■総論

地域、歴史と「つながりの豊かな」住まい●西村一朗

■各論

「施主」と「私」のあいだ●佐々木恵子

シングル女性が家を建てる、ということ●牛窪　恵

都市居住とSOHO空間―都市型賃貸集合住宅の事例から―●田中啓文

塔の家に暮らして●東　利恵

子どもの考えるこだわりのインテリア―部屋のモデル制作実験より―●片山勢津子

伝統をみつめていたら、普通の家が見えてきた●宮本繁雄

本特集企画担当編集委員

阿部泰浩／神谷浩司／黒栁亮／高野直樹／田中浩介／戸井賢一郎／ペリー史子／本山仁

総論

地域、歴史と「つながりの豊かな」住まい

西村一朗

■「つながりの豊かな」住まいとは■

私は、10年ほど前から「つながりの豊かな」住まい、地域居住を提唱している。最初の公の発言は次のようである。「…『つながり』とは何かと言うと、第一に隣近所の住宅や人々とのつながり、第二に太陽光線、大地、空気、水、緑等の自然環境や道、集会所等の人工空間と言った環境とのつながり、そして第三に自分史を含む時系列的歴史的つながりです。私は、これらを現存する住居から展開していって、まわりや歴史とのつながりを意識して、つまり地域人間関係とか地域環境とか、歴史的なつながりをもつ住居として研究し、意識的に『つながり』の豊かな住居、住環境を形成するように実践したらどうか、と思います。…」(『住まいの研究誌』133頁、1996年11月刊、住田昌二先生の大阪市立大学退職記念誌)と。このように発言せざるをえなかった背景にはプライバシーの極端な重視、人工的に環境条件を自由にコントロールすればよいといった極端な技術依存、そして過去の歴史や伝統を軽視する超近代主義等による住居や住環境の計画・デザイン傾向に対する危惧があった。

現時点で再度、考えてみよう。原理的に考えると、私たちは空間と時間とに「つながっている」ことになる。まず空間については、人々と環境に分ける。その人々も家族、地域住民等に分けたほうが良いと考えている。「人々とのつながり」を手段・段階別にみると、1)五感交流、2)言葉によるつながり、3)共同行動によるつながり、そして4)制度によるつながりになるのではないか、と考えている。環境は、『住まいの研究誌』で発言したように自然環境と人工環境に分けたほうが良いだろう。次に時間とのつながりについては、歴史との重層的つながりと捉えたらどうかと考えている。重層的つながりとは、意味ある時間の幅(タイム・スパン)の長短を設定して、それぞれとのつながりの重層を意味する。私は、それらすべてのつながりを追求するという姿勢をとりたい。一番長いのは、宇宙史であり、一番短いのが自分史ではないだろうか。その中間に、地球環境史、生物史、人類史、古代史以来、近代史、現代史等があるだろう。

そして、それらの人々、環境、歴史との「つながりの豊かな」住まい、居住地を形成していきたいものである。本稿では、人々、環境をまとめて地域としている。つまり地域、歴史との「つながりの豊かな」住まい、居住地を目指したい、ということである。

■OMソーラーハウスの自宅づくり■

現在、住んでいるのは庭付き郊外戸建て住宅で、木造でOMソーラーハウスである。平城・相楽ニュータウンの相楽部にある。1993年より計画、1994年5月から建設に入り、同年11月から住み始めて13年近くになる。途中、1995年1月17日に阪神・淡路大震災が起こって、京都府南部も大揺れに揺れた。

この敷地を選び、住宅を計画し、建設したのは、それまで住んでいた京都市向島ニュータウンの住宅が家族の変化等で不都合になってきたからである。この京都の住まいが「不都合」になってきた理由の一つは、娘が結婚適齢期になりつつあったことである。娘一人が結婚して、いわば「家を出て行く」時には、住居に配慮は要らないと私自身「若い」頃には考えていた。それだけ必要住宅面積が減ると単純に考えていた。しかし、実際に結婚が迫ってくると別の「必要」も考えねばならなくなってきた。見合い相手の訪問や、話が具体的になってきた場合の「結納飾り」のことも考えねばならなくなったのである。前住宅には、そのような座敷や展示空間としての床の間などがなかったので、それらは必要かなとなってきたのである。さらに娘の結婚後のことを考えると、娘夫婦家族が訪ねて来たりする場合、また娘が「出て行った」ことからかえって親戚や友人を招きやすくなった面もあるが、とにかくそれらの場合に泊める空間も必要だな、ともなってきたのである。

そして、50歳半ばに近づいていたので「終の住処」を得るなら今だ、と思ったのである。

この計画は私と妻の合作で、具体的に図面を描いたのは妻である。まず、OMソーラーハウスとすることに決めた。これは、当時、東京芸大教授だった奥村昭雄さんが中心になって開発された、いわば太陽光利用の「空気床暖房、お湯取り方式」の設備を組み込んだ在来工法の住宅である。近くの奈良の工務店、



写真1　自宅北面、
2階右端は浴室



写真2　自宅南面、
屋根にOMソーラーのパネル

大工さんに工事を頼んだ。言わば、地域との「つながり」である。建ててから13年ほど経って補修工事をする時期になってきたが、同じ工務店に頼もうと考えている（**写真1，2**）。

また、この方式、設備は、太陽光や空気といった自然環境との「つながり」の豊かさ追求でもある。このほかの自然環境との「つながり」追求をいくつかあげておきたい。

第一に、お湯の熱量利用と水の節約である。これは、浴室を2階に設けたことから自然と発想できたことである。風呂に毎日約200リットルのお湯を使う。40℃位の温度である。冬の場合、15℃位までエネルギーを使えるとしたら、単純計算では200×(40−15)kcalである。これを、上手く2階の寝室を温めるのに使えれば、と考えて奥村昭雄先生にも相談したが、エネルギーを「変換する」システムの開発に相当の時間、金がかかると分かり断念した。次に、水の位置エネルギーを運動エネルギーに換えて水を節約するアイデアで、2階の浴槽の真下の1階にトイレを設け、トイレの流し水に浴槽の水を使うことで、これは実現している。200リットルを夫婦二人でトイレの流し水に使うので、ほぼ十分だ。この不足の時に補ったり、余った時に流す仕組みを組み込んだ水槽を外壁に設け、そこを経由して下に流すようになっている（**写真3**）。



写真3　貯留水槽（右下）、上は浴室

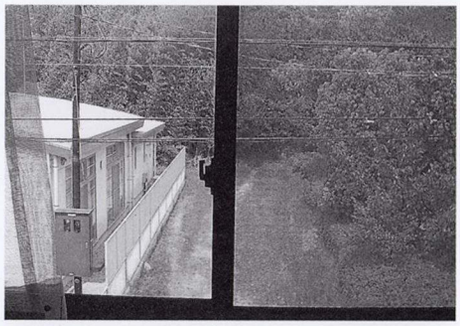


写真4　「近緑の窓」より北を見る。左に集会所



写真5　「中緑の窓」より西を見る



写真6　「遠緑の窓」より東を見る。かなたに山並み

第二に、緑との「つながり」である。外界との「つながり」志向で、窓を大きくしたのだが（これは、耐震性保持からはマイナス）、そのことで、外界の緑が良く見えることになった。2階の北に書斎を設け、そこには三つの窓を設けたが、近くの緑、やや遠くの緑、そして遥かに遠くの緑が見えたので、後からそれらの窓を「近緑の窓」「中緑の窓」「遠緑の窓」と名づけている（**写真4，5，6**）。

環境との「つながり」追求以外の、収納空間の計画と高齢化対応について簡単に説明する。

収納空間については、集中的に納戸を2階に設けて衣類箪笥もそこに入れた。部屋にも箪笥がはみだしてはいるが…。私自身の本や資料等は、2階の書斎に本棚を多く入れて収めるだけでは足りなくて、階段の壁に本棚を組み込んだ。さらに古いアルバムや日記ファイル等は、プレファブの地下室（三畳位）に収めた。計画にはなくて、工事途中で気づいて大工さんに無理を言って作ってもらった収納空間がある。それは、工事中、毎日のように見に来ていて、骨組が出来、階段も出来て2階へ初めて上がってみた時、上がり際に横に見て天井裏が見えた。そこに縦に狭いが奥深いスペースが広がっている。そうだ、この天井裏は、階段から使える収納空間にならないか、と気づいたのである。そこで、そこにも囲いを作り扉も作って貰って、収納空間としたのである（**写真7**）。

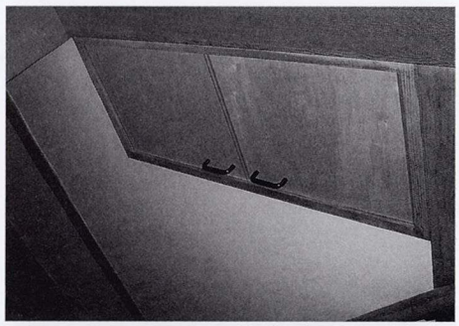


写真7　階段途中の天井裏収納扉

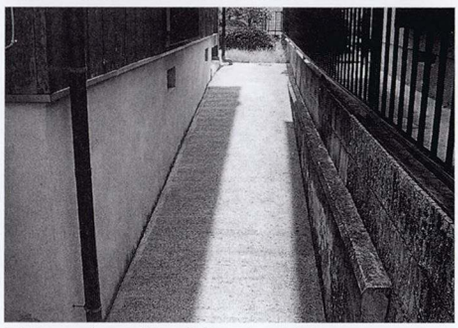


写真8　家の西側、車椅子専用斜路

最後に高齢化対応について、徐々に夫婦共々年をとるのだから現在は元気でも先行きを考えようという姿勢で計画した。玄関から室内床に上がる高さを低めにして、上り下りしやすくした。床の間、畳の間に段差を付けず、足の運びを考慮した。玄関先の階段は何ともならなかったので、今後手すりを付ける予定である。仮に車椅子生活となったら、外からは、家の側の通路部分を斜路として車椅子で上がれるようにし、庭に回って濡れ縁から「よじ登る」こととしている（**写真8**）。

■コーポラティブ住宅の一員として■

1996年頃に平城・相楽ニュータウンで「コーポラティブ住宅建設運動」が起こった。運動の中心に友人がいたし、運動自体の意義や面白さも分かっていたので、私は、いわば、その運動の「応援団」の一人として振る舞っていた。参加者に出入りがあり、最後に敷地

も決まり（ニュータウンの奈良側）、全体設計もほぼ決まってきた段階で、一面が「地下」となる住戸に誰かが入らないと全体計画が成り立たないということで、友人から「西村さん、入って貰えないか、地下に接しているし、小さく計画すれば四百万円ほどで出来るはず…」と言われた。数年後に奈良女子大学を定年で退職（当時はまだ退官と言っていた）することになっていたし、大学においてある私物の書籍や長年かかって集めた資料なども多い。現在の相楽ニュータウン部にある自宅では、到底、全部収まらない。倉庫でも借りようかと思っていたが、それより書斎風の書庫が良いに決まっている。それに、四百万円だったら退職金の一部で何とかなる、と思い、途中で「応援団」から当事者に変わったのである。以後、いろいろな相談の会合に参加したり、忘年会、花見の会などに参加したりして23軒の人たちとの「つながり」も徐々に出来ていった。阪神・淡路大震災の後だったので、何としても安全で、近所同士の助け合いも出来るコミュニティを求めている人、高齢期に向かい安心できる近所づきあいを求めている人、子育てで安心・安全の町を期待している人、単身者同士でも気楽に付き合えるところを望んでいる人など様々だったが、総じて「人々とのつながり」を求め、期待している人たちだな、と思った。

こうして、1996年から2000年までの運動の４年間（私はもっと短期間）に、実際に「人々のつながり」は出来ていったのである。こういう時間がかかる運動だが、コーポラティブ住宅地では、実際に入居する頃にはコミュニティが形成されているのである。これが、普通のマンションとの大きな違いである。何事も話し合い、出来るだけ全員の合意で進めるので、時間がかかる訳である（**写真９**）。

「環境とのつながり」についてもいろいろ話し合って決めたのである。例えば、皆で決めて屋根に降る雨水をタンクに溜めて、草花にやったり、路地にまいたりしている。「天水を路地にまきますエコロジー」という訳である。全体の中庭や周辺緑地にどういう樹木を植えたら良いかも23軒あるので個木として１軒１木で好きなものを選ぶほか、共木３本（４本）は話し合いの上、多数決で決めた。私たちの家では個木として柿を選んだ。正岡子規の「柿くえば鐘が鳴るなり法隆寺」の俳句もあるし、柿の葉寿司は奈良の名物でもある。全体で決めた共木は、１位は欅（けやき）、２位は楠（くす）、３位はコブシとなった。咄嗟に私が「柿に楠　欅にコブシ　かきくけこ」と言ったら「座布団二枚！」と声がかかるように、和気あいあいと会合は進むのだった。もう１本、当然の共木として中庭の真ん中に桜を植えることになった。それで共木は４本なのである。

このコーポラティブ住宅地は「つなね」という名称を持っているが、これはまさに「歴史とのつながり」を表している。この呼称を提案していただいたのは、奈良女子大学の坂本信幸教授で、『万葉集』の研究者。この「つなね」の住人に坂本先生の知り合いがおられ、依頼され、坂本先生も快く引き受けられ、奈良に相応しく古代の文献から抜き出して提案していただいたのである。当時、横文字、カタカナの名称も多かったので、奈良らしく日本語でいこうや、となったのでは、と推察する。「つなね」住人で編集した冊子『つなね物語』の１頁に坂本信幸先生が「つなね」の由来という解説文を書かれているので、そこから抜粋して「つなね」の意味を伝えたい。出典として『日本書紀』の顕宗天皇条があげられているが、省略して坂本先生の解説を引用する。

「我が国では古代から、『新室（にいむろ、新しい家のこと）』を言寿ぎ祝うならいがありました。それを室寿（むろほぎ）と言います。言語の呪力がまだ失われていなかった古代では、めでたい詞を連ねて新室を祝うことで、言語の力により、堅固で災禍のないめでたい新室になると考えられていたのです。原初的な建物は、木組みに釘を用いず、栲や葛の縄で縛って構築する方法をとっていましたから、家の芯をなす柱や、棟、梁、垂木などは、その綱でもって結び固められていました。何回も結んだ綱はその尻を長く垂れ下げられ、長い形状は長寿を象徴しました。それゆえ、葛根（つなね）はことに新室の長久を祝福する中心となる素材としてめでたいものでありました。…それぞれの建築材料を結び固め、安定と長寿を祝う『つなね』こそは、コーポラティブ住宅建設に結束し、耐久性にすぐれた、住む人の健康を守る家を造ろうとする会の思いを一語にして表す愛称といえましょう」。

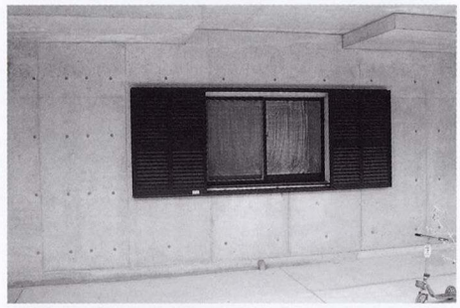


写真10　「窓のある書庫の家」外観

坂本先生にも、オープニングの会に来ていただき、この話をしていただいた。「つなね」は1996年５月にスタートし、４年の歳月を経て2000年３月に引き渡し、４月に竣工式を行った。まさに４年間の「住宅大学」であった。

私は2005年３月に奈良女子大学を定年退職し、４月に現職に移った。まだ「片付いていない」が、このセカンドハウスは私の第二書斎である。住戸名称は「窓のある書庫の家」と言っている。同時に奈良女子大学の仲間ら、院生らと立ち上げたNPO「地域支援研究フォーラムなら」の事務所も「つなね」住人の承認の下、ここにおいている（**写真10**）。



写真９　「つなね」住宅地遠景（手前）

■思い出し・思い入れの住宅論 ―自分史とのつながりをスタートに―■

私は「建築雑誌」1990年12月号に「思い出し・思い入れの生活空間論」を書いた。現実の住まいの形は、無から突然に有が生まれるように生まれるのではなく、前有から現有が生まれ、さらに現有が未来有に「進化」していくものだ、と考え、その小論を書いたのである。その実例の一つとして、私の子供時代の金沢市の自宅と、現在の平城・相楽ニュータウンの相楽部に移る前に16年余も住んだ京都市向島の家とを比較して、金沢の住まいの体験が、いくつも京都・向島の住まいに反映しているのではないか、と紹介している（図1，2）。言わば「自分史」レベルでの「歴史とのつながり」であるが、前述の「つなね」のように古代の歴史的名称を現代に引き継ごうという「つながり」方もあり、私は「歴史とのつながり」と言った場合、重層的に多面的に「つながり」を考えたら良いと思っている。何よりも、そういう志向性が大切と考えている。「人々とのつながり」や「環境とのつながり」は一定経験的にも了解でき、人間の成長と共に経験的にも形成されていくものだろう。他の動物にあっても「仲間とのつながり」や「生息環境とのつながり」は認識しないと生死にかかわるので、彼らの成長と共に認識が進むと考える。しかし、過去との、歴史とのつながり認識、未来への意識的計画は、人間のみに可能であって、しかも意識的努力がなければ不可能なのである。

私がたまたま見出した一例として、現代のコーポラティブ住宅である京都の「Uコート」は、平安時代の寝殿造りと「歴史的つながり」を有するのではないか、との仮説を述べたことがある（『生活環境のあり方について―住環境学徒の視点から―』家政学研究、2004年3月、奈良女子大学家政学会）。ここでは紙面の関係で両者の配置図のみ示しておきたい。良く似ていると思いませんか（図3）。

生物史レベルでの一例として、私は「手すりは、すべからく木（手すり木）の方が良い。なぜなら、われわれは「猿時代」からずっと手すり木を握って生活してきたからである」と言っている。耐久性や経済性で金属の手すりも多いが、戸外だと夏は熱く、冬は冷たく握りづらい。木は体温に近く、「猿時代」の大昔から握りなれているのである。



図1　筆者の故郷のすまいと向島ニュータウンの住まい

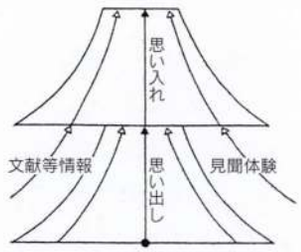
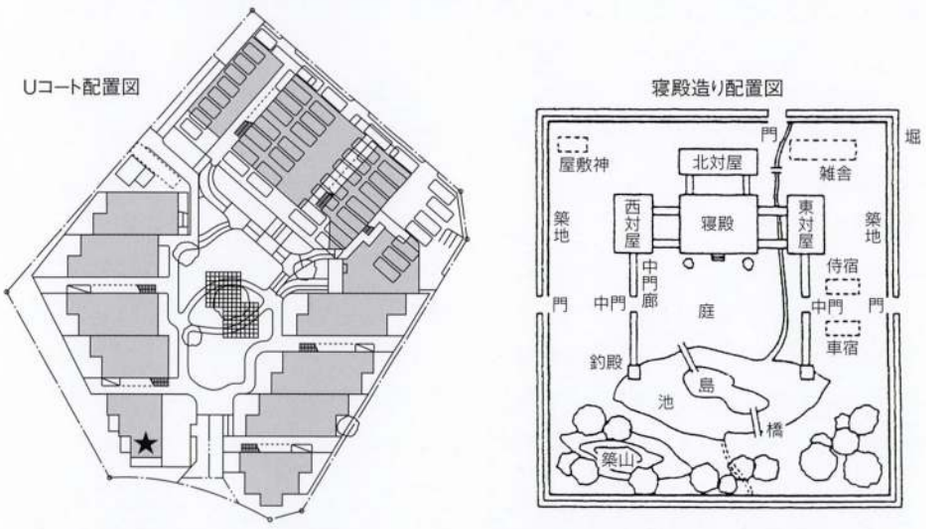


図2　思い出しと思い入れの関連



出典　Uコート／延藤安弘、「集まってすむことは楽しいナ　住宅でまちをつくる」、1987年12月、鹿島出版会
寝殿造り／石堂正三郎・中根芳一、「増補　新住居学概論」、1984年2月、化学同人

図3　Uコートと寝殿造り

■住みよい第二の故郷を目指して■

私は、平城・相楽ニュータウンの相楽部に庭付き戸建て住宅、平城部にコーポラティブ住宅を持っており、両方とも、「関西学研都市」の中に位置づけられる。「関西学研都市」とは京都府、大阪府、奈良県の7市1町よりなる。すなわち、京都府では精華町、木津川市、京田辺市、大阪府では枚方市、交野市、四条畷市、奈良県では奈良市、生駒市である。

ここに、最近、地域SNSが生まれようとしている。SNSとは、ソーシャル・ネットワーク・システム（またはサイト）で、全国版のmixiなどは良く知られている。私も昨年6月頃から、この全国版に誘われて入って交信している。それで、これは町づくり、地域づくりに活用できるのでは、と考えた。同様に考えている何人かと研究会を立ち上げている。その仲間の一人が同じく関西学研都市に住んでいて、地域でSNSをつくったらどうかとなり、他の仲間や先発の地域の人や関西学研都市に住み、または働いている人たちで関心ある人にも呼びかけて、数十人の規模で「試行版SNS」を始めている。地域SNSと全国版SNSの違いは、地域SNSは、大体リアルにも知っている人が多いし、オフ会などでリアルに知ることも比較的簡単だ。だから無責任な発言は、出来にくいことになる。環境や歴史についても、バーチャル情報で分かりにくければ、リアルに出かけて調べることも出来るであろう。全国版ではこうはいくまい。

これによって、「けいはんな」地域では、住まいづくりやまちづくりにおいて、人々とのつながり、環境とのつながり、そして歴史とのつながりがバーチャルにもリアルにも深まるのでは、と期待している。（2007年5月1日）

（にしむら　いちろう　平安女学院大学教授、工学博士）

各論1

「施主」と「私」のあいだ

佐々木恵子

「こだわり」が、たいそう値打ちのあることのような意味で使われはじめて、だいぶ時間が経つ。先進国からエコノミックアニマルと揶揄され、脇目もふらずに突っ走ってきた私たちは、とりあえずマイホームを手に入れられるようになった。そのころ、誰かしらが自分の人生このままでいいんだろうか、もう少し毎日をていねいに、細かい点にも心をくだいて生きたほうが豊かな気分になれて幸せなのではないだろうかと気づいて言い出した。小さいことでも、ないがしろにしないで大事に、些細な点にこそ思い入れを深くして…が、「こだわって」と表された。少し値が張っても、手間ひまがかかっても、そのために回り道しても、が「こだわり」だった。他人と差異をつけるためのささやかな主張、個性を表現する意欲のあらわれである。

その後、この言葉の位置はますます変わって、今では褒め言葉として使われる。「こだわり」とうたわれていれば読者は納得し、こだわりのないことはつまらないこと、取るに足らないこと、として相手にされない。

さて、その「こだわり」にあたるかどうか、経験した中からいくつかをあげてみたい。

■打ち放しの空間に住みたい■

大阪北部にあるこの家を設計するときに出された希望、条件は「内外ともコンクリート打ち放しの家」だった（**写真1**）。予算面でも難しく、断熱などの必要性を説いて考えなおすように願っても、これが変わることはなかった。見た目も触感も好きだから寒くも暑くも耐える、どうしても打ち放しの空間に住みたいという言葉を何度も聞くうちに、この家族の生活にたいする真摯な姿勢と考え方にいつか共感していた。

キッチンを設計するころには、「施主」と「私」が同体であるかのようになっていた。限られた予算の中で使える既製品を嫌ってできたキッチンである（**写真2**）。竣工時に骨格だけだった空間には、創意と工夫のある個性豊かなしつらいが施され、家族の時間がきざみこまれている。

それぞれが教育者、研究者として確立している夫婦二人の家の場合である。研究に、指導にといそがしい日常生活の中で、ふたりがともに家にいる時間をことのほか大事にし、この新しい家の実現にむけても、はっきりしたイメージがあった。読書や音楽鑑賞、庭いじり、料理、たまには手芸もする時間は、そのままで豊かなものにちがいないが、限られた中で目いっぱいたのしむためには、空間にも工夫が必要だった。共有の時間をつくるには、家事も、できる範囲でふたりが分担する。しかも、それに費やす時間を苦痛でなく、楽しく気持ちよく終えたいと考え出された水まわりは、洗面、排泄、入浴、洗濯をまとめている（**写真3**）。使用前、使用中、使用後の動線と動作、心理、清掃、整理整頓のしやすさからエネルギーのことまで、あらゆる検討が加えられた結果である。







写真1　コンクリート打ち放しの家
写真2　キッチン、写真3　水まわり

■イメージが近づいてくる■

設計の途中で条件が変わり、こちらのイメージに近づいた例もある。

趣味で油絵をよくする施主の画室に、とつぜん大型のイーゼルが入ることになった。専用の画室をもつ夢の実現を前にして、細部にいたる打ち合わせをくり返していた頃のことで、計画中の天井高さではおさまらず、全体の形にまで影響して変更する。もともと私には、中学時代に通ったアトリエでの体験から、空間の光、緊張感、静けさ、匂いなど、画室には格別の思いがあった。この思いと設計が重ねられずにいたのが、この変更で一気に解



写真4　画室をもつ家

決したのである。それからは、大キャンバスを2階から楽におろす仕掛けなど、細部を詰める設計を楽しんで完成。毎年、この画室から定期展への大作が生まれている（**写真4**）。

■敷地の制約■

依頼者の希望、予算、工期、基準法などが制約としてつきまとうが、どんな場合も、これらは設計の規範になる。なかでも敷地のもつ条件は、立地、方位、規模、環境など厳しければ厳しいほど設計のしがいがあるもので、苦しみながら出した答えが正解だったときはうれしい。

写真5は南北に長い小さな敷地に建つ家の場合で、どの部屋にも自然の光と通風を取りこもうとした。背の高い裏の家とのあいだにできるわずかな庭から、最大限の効果をえようと、2階の床の一部を斜めに切り取り、犠牲にしている。断面スケッチと模型での確認作業を経て決定したものだが、この2階を少し削ることへの施主の理解があって実現した。



写真5　南北に細長い敷地に建つ家

■「施主」が「私」に、「私」が「施主」に映りこむ■

施主との出会いから後、いく度も会って話をするうちに、おたがいの考え方や価値観、共鳴できる部分とそうでない部分などがわかって、仕事は深みを増していく。波長があったとき、「施主」が私に映り、「私」が施主に映りこんでいくと、生まれてくる空間が俄然はっきりしてくる。希望を聴き、期待をうけとめながら、主題を決め、発想、着想を練って主張する。この過程が好きで、また新しい仕事にかかる。





▲写真6
1本のベンジャミンが植わった吹き抜けの居間

◀写真7
トップライトから自然光が差しこむ

条件も希望も全部話したから、あとは任せると言われて出来たもの。町家の建て替えで、3階4階に住まいがあるが、その中央に2層分の吹き抜けの夏の居間をつくった。冬はガラス戸を閉ざして空間を仕切り、暖房費を節約する。屋上からの自然光が、季節、天気、時刻の変化を知らせてくれ、トップライトを開けると風がとおりぬけてここちよいはず。ここに施主のアイデイアで1本のベンジャミンを植えることになった（**写真6,7**）。「私」の意図を正確にとらえて出されたこの案は、もちろん優先されて実現したものである。このベンジャミンのある吹き抜けの白壁に絵や写真をかけると、ここの雰囲気が壊れてしまうと、時間がたった現在もそのままある。これなど、「施主」と「私」が同体になれた例である。

■はじめてみた光に執着する■

主題、着想はそのたびに変わるが、ディテールや材料はほとんど変わらない。……のような材料、つまりみせかけのものはだめ。石油系は、それがユニークで面白そうなものほど、その奥に毒を感じてしまって、これもだめ。Mario　Botta氏がFake Materialを使うことに抵抗はないと語ったと聞いて一瞬、複雑な思いもしたが、私は「わたし」である。敷地ではじめてみた光や影、光景、色などに執着することもある。竹やぶを背景にして白壁の土蔵が、雨の近いことを知らせる雲間からの陽光に照らされたのをみて、なんとしてもこれは残そうと思いこんでしまった（**写真8**）。他人からみれば拘泥なのかもしれない。

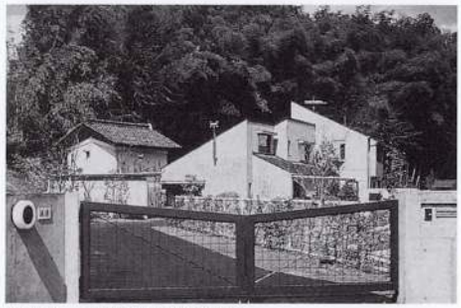


写真8　白壁の土蔵を残す

＊

「私」の関心はいつも、「施主」とのあいだに生まれてくるはずの空間にあって、そのために何を優先するか、何を捨てるかの作業がつづく。ここにあげたものも、こだわっていたという思いはなく、「施主」が何かにこだわって、「私」がそれを支障だと感じた記憶もない。

主張を曲げない、執着する、優先する、大事に思う、愛着、本物へのあこがれなどを総じて「こだわり」とかたづけてしまっていることに言葉のやせ細りを感じ、どうも変だとこだわっているのだが、どうだろうか。

※写真8点：撮影／大竹静市郎

（ささき　けいこ
アトリエトリフォイル室内建築設計事務所）

各論 2

シングル女性が家を建てる、ということ

牛窪　恵

「うちの親、早起きで困るんです。休みの日ぐらいゆっくり寝ていたいのに、どうしても起こされちゃう」(32歳　アパレル)

「残業で遅く帰った夜は、お化粧一つ落とすにも気を遣う。洗面所が両親の寝室の隣で、水音が響くんです」(38歳　マスコミ)

両親との“生活時間帯”の違い、それが30代のシングル女性から多く寄せられる「親と暮らす悩み」だ。

いまや30代女性の4人に1人(約25%)が未婚、そのうち75%が親と同居する、いわゆる「パラサイト・シングル」である。団塊ジュニア(現在31～36歳)を含む彼女たちの親は、おもに団塊前後の50～60代。高度成長期に家を建て、築25～30年の一軒家に暮らす家族も少なくない。その場合、30代のシングル女性はいまだに「かつての子ども部屋」で寝起きしているケースが大半だ。

30歳を超えた彼女たちが、現在も“子ども”なのか。もちろん、そんなはずはない。確かに統計上で「夫婦と子世帯」などと表記される機会は多いが、生活スタイルや考えかた、親とのかかわりは明らかに「親子」ではなく「大人対大人」であろう。

ではシングル女性が、過度に生活時間帯の違いを気にせず、「大人対大人」として親と心地よく暮らせる住まいとは、いったいどんなものなのか。それが、積水ハウス㈱と、私が代表を務める(有)インフィニティが共同で開発した住まい「カーサ・フィーリア　娘と暮らす家(06年4月発表。以下、「カーサ・フィーリア」)」の発想の原点だ。

きっかけは04年夏、積水ハウス・商品開発部(現在)の梅原基伸氏による一本の電話から始まった。

「実はいまうちの会社で、シングル女性の戸建て需要について模索してるんです。牛窪さんの本、読ましてもらったんですが、ぜひ一度お目にかかれませんか？」

梅原氏が言う“牛窪さんの本”とは、同年4月発刊の拙著『男が知らない「おひとりさま」マーケット』(日本経済新聞社)。30代を中心に、シングル女性のライフスタイルを、彼女たちのナマの声などから探る一冊だ。

このなかで梅原氏は、親と暮らすシングル女性の深層心理に着目。単なる“定量”マーケティングではなく、彼女たち一人ひとりの声を聞く“定性”マーケティングを繰り返すことで、シングル女性の真の戸建てニーズを知りたい、と語った。04年秋、2社共同で「One＋deux研究会～これからの家族を考える会」(代表：牛窪恵)を起こし、シングル女性(娘)とその母を中心にインタビューしようと決めたのも、そのためだ。

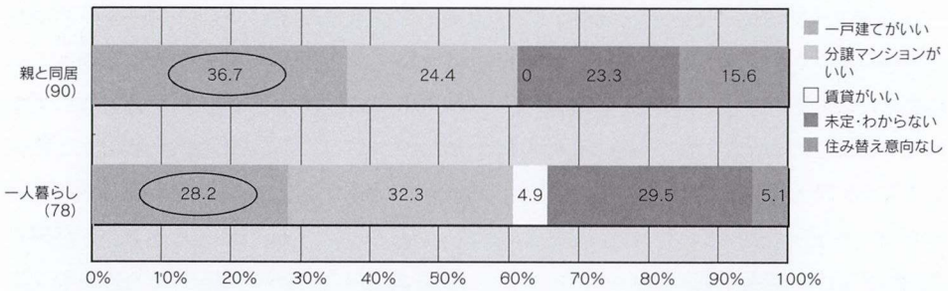
梅原氏の考えに、私も強く共感した。当時マスコミ各社は、シングル女性のマンション購入について競って報道していたが、私には腑に落ちない点があった。たとえば、マンションを買うために住宅金融公庫を利用したシングル女性のデータを見ると、平均年齢は「38.6歳」、平均年収は「614万円」、頭金の平均額は「1248万円」とある(当時。「公庫平成14年度融資利用者調査報告」)。果たしてこれが彼女たちの“主流”なのか、という点だ。

統計によって多少幅があるが、一般には現在、30代の働くシングル女性(フルタイム就業)の平均年収は、「330万円前後」とされている。とくに30代前半～半ばの団塊ジュニア層は、労働者派遣法の改正後に“ハケン”になった女性が多く、35歳を過ぎると収入が増えるどころか減ることも少なくない。一部、親が頭金を負担することでマンション購入に踏み切る女性もいるが、年収300～400万円台、つまり30代シングル女性の“主流派”は、「欲しくても手が出ない」「そこまでして、一人暮らしをするほどではない」と考え、賃貸マンションや「親と同居」といった道を選択しているのだ。

■根強い戸建てドリーム。課題は“可変性”■

では彼女たちは、新たな「戸建て」に対する夢や理想を一切持っていないのか……？

実は積水ハウスでは01年4月、すでにシングル女性に対するアンケート調査を行っていた。その結果浮かび上がったのは、10人中3人のシングル女性が「戸建てドリーム」を抱いていた、という事実。「次に自分が住むなら？」の問いに、3割以上(一人暮らし・同居含む)のシングル女性たちが「戸建て」と回答していたのだ。



次に住むならどんな家？（回答者：未婚女性400人）　出典：01年　未婚女性の持ち家志向調査（積水ハウス）

需要は確実にある。しかしその一方で、課題も山積していた。それまでこうしたコンセプトで開発された住まいは、ほとんど他に類を見なかったからだ。長年、“ニューファミリー”を中心に商品を提案してきた住宅業界にとって、「カーサ・フィーリア」の開発は、大きな冒険にほかならなかった。

だが、梅原氏の決心は揺るがなかった。そこで「これからの家族を考える会」では、母娘に対する綿密なアンケート調査や、約400人に及ぶ研究会メンバーへの対面インタビューを複数回実施。シングル女性が親と暮らす「理想の住まい」とは何かを、具体的に模索・検証することにしたのである。

冒頭で述べたとおり、間取りについては両親との“生活時間帯”の違いから来る悩みをもらす娘が目立った。たとえば、「自分が立てる音に気を遣う」(32.5%)、「自分が使う明かりに気を遣う」(25.0%)、「親の立てる音がうるさい」(10.0%)など。そこでカーサ・フィーリアでは、「娘の部屋に水回り（サニタリー等）をつける」「娘と両親、それぞれの部屋につながるよう階段を２本に分ける」といった提案を行うことにした。

他方、最後まで頭を悩ませた点がある。最大の難点は、住まいの“可変性”だ。

従来の典型的な“ニューファミリー”を対象にした住まいでは、築５年以内に大きな可変性が生じるケースは少ないだろう。だが、大人のシングル女性は違う。彼女たちの多くが口にする「結婚は、してもしなくても構わない」、この言葉の裏にあるのは、「いい男性に出逢えば、すぐ結婚するかもしれない」ということ。“親と暮らす”前提で家を建てても、半年後には娘の自分が出ていくかもしれない。あるいは結婚相手の男性が婿入りして、いわゆる“マスオさん”型の二世帯住宅に転用する必要が生じるかもしれないのだ。

もう一つ、将来親の“介護”が発生する可能性もある。私たちがヒアリングした結果、娘は総じて30代後半に差し掛かる頃から、介護も含めた「親の将来」を気にし始めるようだ。たとえば、「この前、母が倒れて、救急車を呼んだ」「親も60歳を過ぎて、病気がちになったので心配」など。別のアンケート調査でも、「今後に対する不安」で８割のシングル女性が「親の介護」と答えている。

介護となれば、親の寝室にも水回りがあったほうがいい。既存の介護サービスを利用するとなれば、２階より１階に部屋があったほうが便利だ。これらにも対応し得る可変性を付加すること。これも今回、商品開発を行ううえで大きなテーマであった。

■“世間の目”が障害に。キーワードは「ポジパラ」■

カーサ・フィーリアの発表は、昨年４月。その３か月前に完成した積水ハウスのモデルルーム（東京・立川）は、私たち30代女性が一般消費者として見ても、うっとりするほど素敵な住まいだった。「これからの家族を考える会」の母娘メンバーも、「こんな家に住めたらなあ」と口々にもらした。

けれど一方で、この空間の提案がゴールでないことも改めて分かった。30歳を過ぎたシングル女性とその両親の頭には、“世間の目”という障害がある。すなわち、「○○さんのお宅、同居を前提に家を建て替えたんですって。お嬢さん、もう結婚する気ないのかしらね」といった、隣近所の評判。これが家族の建て替え需要に、ブレーキをかけてしまう可能性もある。実際、母娘へのヒアリングでも多く耳にした声だ。



専用サニタリーを備えた娘の部屋
（積水ハウス・立川ビーダイインズ展示場）

シングル女性が同居を前提に家を建て替えると、なぜ「結婚する気がないの？」と揶揄されるのか。30歳を過ぎて両親と同居しているだけで、なぜ「一人前でない」「自立していない」と批判されるのか。それは、「同居＝パラサイト・シングル」という旧来の固定概念があるからに違いない。だが、彼女たち全員が「自立していない」はずがない。そのことをどうにかして、世に示せないか。

そこで私たちがたどり着いたのが、「ポジティブ・パラサイト（ポジパラ）」の概念。シングル女性が親と暮らすのは、決して後ろ向きなことばかりではない。一般に、同居は一人暮らしに比べ、経済的で安全性が高く、何よりも肉親がそばにいる“安心感”がある。これは、私たちがヒアリングを続けてきた生の声やデータからも立証されている。

だからこそ、パラサイトをネガティブでなくポジティブにとらえたい。「家を建て替えるなら、娘のあなたも費用を一部負担しませんか？」との呼びかけに応え、シングル女性に「私も自立した大人です」と主張してもらいたい。それが「ポジパラ」の概念だ。

30代の団塊ジュニアとその母（おもに団塊世代）は、90年代から「一卵性母娘」と呼ばれ、非常に仲がいい世代だ。私は彼女たちを「Hahako（ハハコ）世代」と名づけた。昨年12月出版の拙著『Hahako世代をねらえ！』(ダイヤモンド社)でも、「これからの家族を考える会」の研究成果とともに、団塊母娘の深層心理を紹介している。

“仲良し”は、ややもすると“依存”を生む。だが、居住空間や費用負担について「親子」ではなく「大人対大人」の理想的な関係が築ければ、それを依存とは呼ばない。親子が“もたれ合う”のではなく“支え合う”関係だと言えるはずだ。そしてそれこそが、シングル女性が真に望む「家を建てる」ことなのではないか……。私はそう信じてやまない。

（うしくぼ　めぐみ　有限会社インフィニティ代表取締役　マーケティングライター）

各論 3

都市居住とSOHO空間

－都市型賃貸集合住宅の事例から－

田中啓文

都心に人が帰ってきている。「通勤」の必要を無くす、あるいは「通勤」時間を短縮することによって、自分本来の時間を取り戻し、都心での文化的刺激や利便性を思い切り享受しながら、職・住・遊が一体となった行動的な暮らし方を楽しむ。そんなライフスタイルを選択する人が増えた結果である。

ここでは、職住近接という意味では最も究極的なライフスタイルである、SOHOと表現される仕事場を住空間の中に、比較的まとまったスペースとして併設したものを、筆者の事務所で多く手掛けている都市型賃貸集合住宅の設計事例の中から取り上げて紹介し、都市における住まい方の一形態としてのSOHO住宅について考察してみたい。

■SOHO住宅創造のテーマ■

■そこに居ることの快適性

SOHOは創造の場であり、一人、または少人数が一日の大半を過ごす場である。仕事に思う存分集中できる環境と同時に、必要に応じて息抜きや気分転換ができて、心理的解放感が得られる居心地のよい場でなければならない。そのためには、プライベート部分と合わせて適宜空間の広がりが確保できるようなプランとしたり、外部空間との関係を工夫して、光や風や緑といった自然の要素を、できる限り身近に感じられる設えが必要である。

■分離と接続

独立したワーキングスペースを持つSOHO住宅においては、公私のゾーニングが最も重要である。来客時等必要に応じてプライベート部分と明確に分離できることは最低限必要となるが、前述のような快適性を確保するためには、おのおのを区切りつつも、つなげることが重要であると考えている。メゾネット住戸であれば、階ごとに公私の分離がしやすく、また、おのおのに出入り口を設けることも容易になるため、SOHO住宅に適した居住形態であると思われる。この場合でも、上下階を完全に分離するのではなく、吹抜等を設けて両者をつなげ連続させること等で、公私ともに、より快適で豊かな空間が得られる。フラット住戸の場合の平面的な空間の分割には、開閉自在のフレキシブルな建具や、可動家具等が有効である。

また、公私の間に「中間領域」的な空間を設けることで、両者に適度な距離を置きながらも空間の連続性を確保したり、建具の開閉によって、どちらかの空間の延長として臨機応変に使うことが可能になる。前述のメゾネット住戸の吹抜も、「中間領域」の一形態と言える。また、「中間領域」を半外部的な空間とすれば、両方の空間に光や風を取り込み、身近に緑を楽しむこともできる。

■SOHO住宅の可能性■

■街にひらく

戸建のSOHO住宅であれば街路に対して、集合住宅の中の１ユニットであれば廊下等の共用空間に対して、開いた設えが自然な状態と言える。都心においては、プライバシーを重視する余り住居が街並みに対して閉鎖的になってしまう事例が多いが、SOHO住宅の場合、SOHOが街に開いた顔を持ちながら、プライバシーが必要な居住部分と街との間のクッションとして機能する。

集合住宅の共用部分を街路と連続させ、かつ、このような街に対して開いたSOHO住宅が多く集積すれば、都心の街並みはより活気のある生き生きしたものになると思われる。

■集住とSOHO

―補完し合い、刺激し合う空間

地価の高い都心では、郊外の住まいのような広さを求めることは難しい。しかし集合して住まうことを選択すれば、豊かな共用空間を共有できる。そして、目の前に広がる都市空間そのものが24時間を通しての生活フィールドとなり、限りある居住空間を補って余りある空間（施設）が手近に揃っている。さらに、自らの生活の糧である仕事場を併設したSOHO住宅の場合、公私を連続させたり一体化することによって互いに空間的な広がりを補完しあい、限られたスペースの中でも、ゆとりある空間を得ることができる。仕事場と住居とを別々の場所に求める場合よりは、遥かに効率的かつ経済的であると言えるだろう。

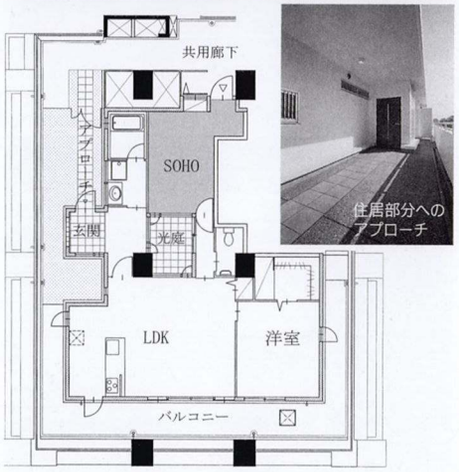
そして、SOHOという創造的でアクティブな空間が居住空間の中に取り込まれることで、街とのかかわり方や、公私の関係の付け方、快適性の求め方等を含めて、より刺激的で多様な住空間創造の可能性を秘めている。

■SOHO空間の具体例■

■中間領域を介してSOHOを分離

①光庭による分離（UR都市機構―船場瓦町）


光庭をはさみSOHO部分を見る



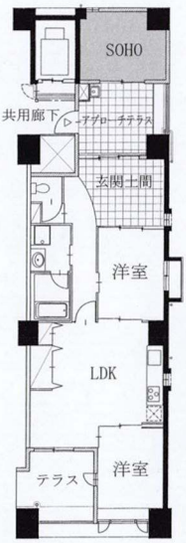
住居部分へのアプローチ

住居部分とは完全に独立して、共用廊下より直接入れるSOHOを用意した。最上階であることを利用し、SOHOと居住スペース（LDK）との間に光庭を設けて、ゆるやかに空間を分離しつつ、視覚的には一体化している。光庭は家の中心となり、空間に奥行きを生み出す。便所は両スペースの中間、光庭に面した位置に設け、仕事上の来客等がプライベートなスペースを経由せずとも利用できるようにしている。住戸専用のアプローチは、住戸のセットバック部分を利用した奥行きのある空間としており、戸建感覚を表現している。

②離れ屋として（UR都市機構―船場瓦町）

共用廊下を経てこの家の玄関を入ると、そこは半屋外のテラスとなっている。このテラスに開いて、離れ屋的に独立したSOHOがある。反対側のテラスに続くのは、玄関を兼ねた6帖大の土間となっており、ここもテラスと一体的な多目的利用が可能。土間に続く居住スペースを含め、この家全体はすべて開閉自在な建具で仕切られ、バルコニー部から離れ屋に至るまで、連続的なつながりを持っており、SOHOを含めた家全体が一体空間として感じられる。


玄関土間よりバルコニーを見通す

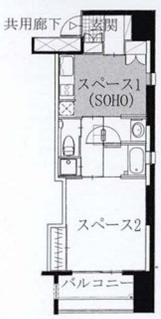


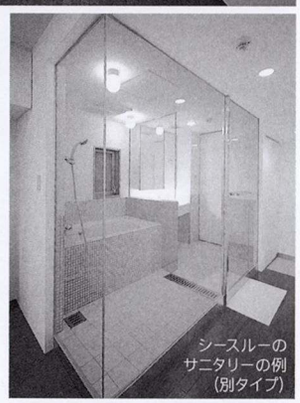
通風、採光も良好であり、テラスに緑などを置いて楽しみながら、自然を感じて伸びやかに働き、暮らすことができる。

③シースルーのサニタリーをはさむ

（RITZ SQUAREⅡ）


サニタリーを通してバルコニー側居室を見る




シースルーのサニタリーの例（別タイプ）

単身者居住を前提にした、都心型の小規模集合住宅の例。玄関につながる空間は、中央部にあるシースルーの水回りをはさんで、奥のバルコニーに続く居室部分と分離されている。限られた空間の中で最大限の広がりを得、また、公私を明確に分離しながら、奥まで採光を確保できるよう配慮した個性的なプランである。

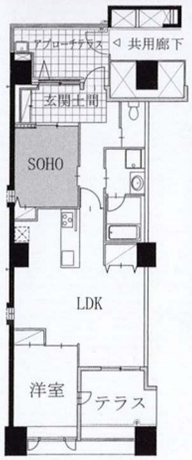
帰宅して、くつろいだり、持ち帰った仕事をした後、風呂に入って眠るという生活動線に沿って、各スペースが順番に用意されたプランであるとも言える。また、分離された2つのスペースは、生活者の創意によって、SOHOを含め自由に利用されることを期待している。

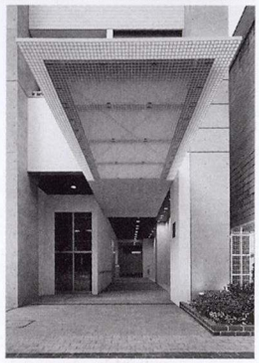
■街とつながるSOHO

①「まちや」の復権

（UR都市機構―船場瓦町）


SOHOから玄関土間を見る




街につながるエントランスホール

アプローチテラスに面した土間が、SOHOを想定した室の前に控えている。土間は、住戸の玄関につながるが、直接引き戸を開いて外から出入りすることが可能であり、日中は共用部分（アプローチテラス）に対して開放的な空間となっている。土間は昔ながらの店のある「まちや」のごとく、ちょっとした接客や打ち合わせ空間として、街（共用部分）との接点となっている。

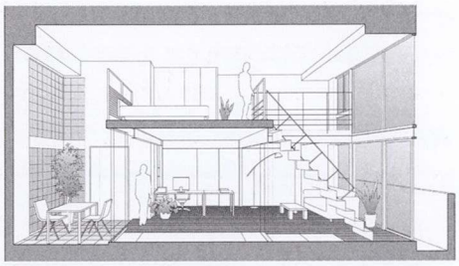
また、引き戸の外側には、「まちや」の格子をイメージした可動式のルーバーが用意されており、通風や採光を確保しながら、必要に応じて閉じることができる。

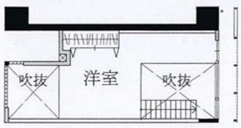
②吹抜の玄関土間でつなぐ

（アーバネックス平野町）

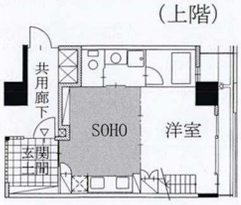
共用廊下に面して、大きなガラスブロックの開口がある。土間は2層吹抜の、玄関を兼ねた打ち合わせ等を含め多目的に利用できる独立性の高い空間で、奥にある居住空間と共用空間との間のクッションでもあり、共用部分に対して開放的なイメージを創っている。

上階は、この土間とバルコニー側の居室の、





（上階）



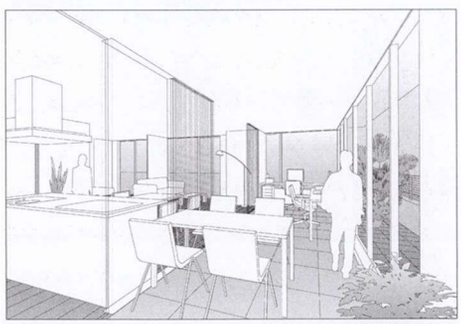
（下階）

両方の吹抜に面したロフト状の空間となっており、下階と空間的なつながりを保ちながらも独立していて、プライベートな利用ができる。

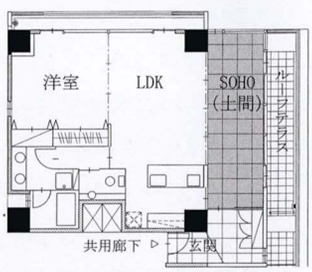
2層分の階高をゆるやかにゾーニングしつつ、どこにいてもタテ、ヨコの一体的な広がりが感じられるよう配慮している。

■こだわりのSOHO

①ルーフテラスと一体化する縁側のような土間（アーバネックス平野町）



玄関よりSOHO土間空間を見る

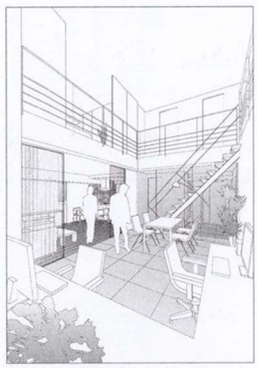


玄関を入ると、ルーフテラスにつながる14帖大の土間空間があり、この場所がSOHOとして位置付けられている。ここは半透明の建具を介してLDスペースにつながり、キッチンからのサービスも容易である。LD奥にある個室まで、空間は建具の開放によって一体につながるが、公から私へ、外から内への明快なヒエラルキーを持っている。

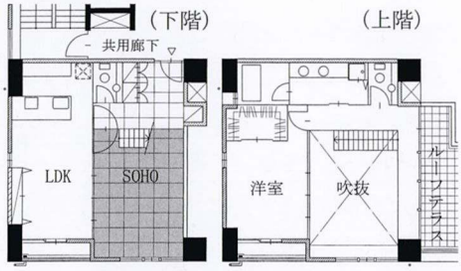
②トップサイドライトのある吹抜のSOHO

（アーバネックス平野町）

下階にのみ出入り口のあるメゾネット住戸の、玄関との間に、ガラススクリーンと階段で仕切られた2層吹抜空間を用意し、SOHOとして位置付けた。この住戸の中心となる、最も開放的で伸びやかな空間である。吹抜上部はルーフテラスに面しており、トップサイドライトから光が降り注ぎ、開放的な建具を介して、上下階の居住部分を一体化してつないでいる。



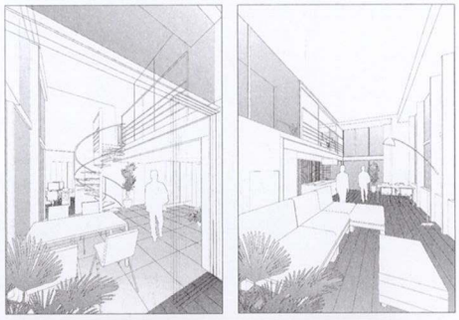
SOHOに面して上下階に居室がある

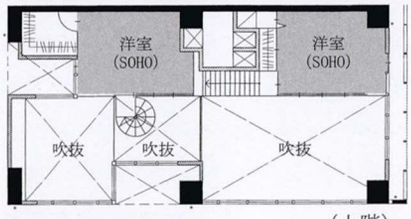


③シェアしてSOHO

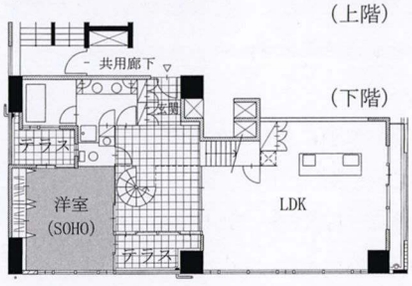
（アーバネックス平野町）

3つの個室を用意し、おのおのがSOHO兼用の独立した住居として利用可能なよう想定されている。個室は玄関とルーフテラスに面した吹抜空間より直接アプローチできるようになっており、このスペースが共通の接客、打ち合わせスペース等として利用できる。





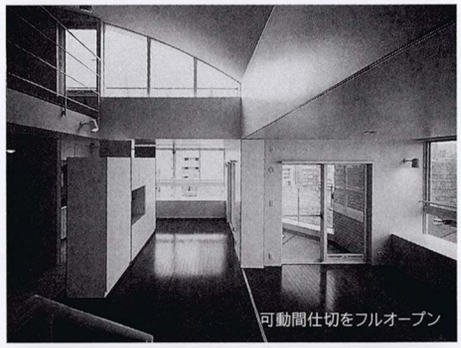
（上階）



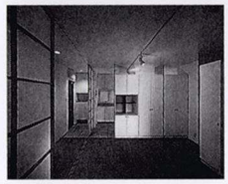
この住居の中心となるLDKは、26帖大のゆったりとした広さと高さを持っており、例えば仕事を持つ3人でシェアして住まうことによって、都心にあって十分な広さと高さのリビングスペースを得ることができる。また、上階の床は、建物の構造体とは分離した鉄骨の柱、梁及びデッキプレートで構成され、将来的には2層分のボリュームの中で3次元的な間取り変更も可能なよう考慮されている。

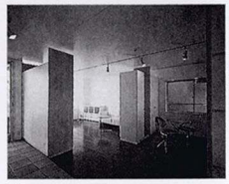
④可動の家具と壁で仕切る

（アーバネックス北堀江）

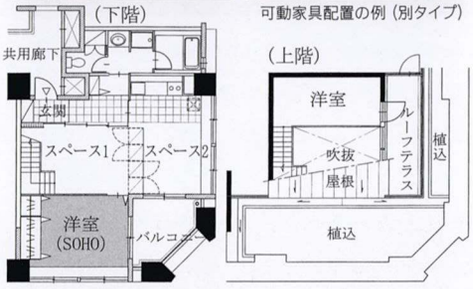


可動間仕切をフルオープン



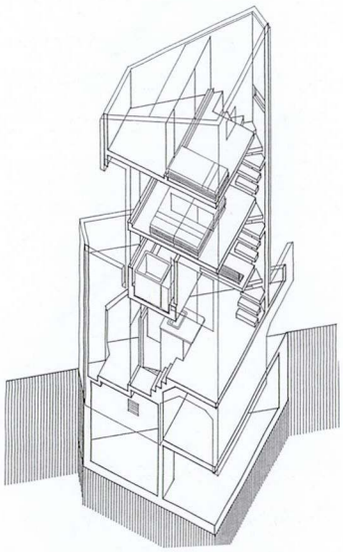


可動家具配置の例（別タイプ）



最上階に位置するロフト付き住居。開閉可能な可動間仕切壁によって完全に独立した空間をつくることができる。この空間をプライベートなスペースとして使うも、あるいは独立性の高いSOHOとして使うも、入居者次第である。玄関につながる空間を自由に仕切れる可動家具が用意されており、空間のボリュームや使い勝手を、好みに応じて変更することができる。可動家具は天井近くまで伸びる転倒防止用の側板を強調しつつ、上部をオープンとしたメリハリのあるデザインとして、インテリアを引き締めている。

（たなか　ひろふみ　田中啓文総合建築研究所代表取締役）



各論 4

塔の家に暮らして

東　利恵



■塔の家の思い出■

昭和41年に塔の家に引っ越した。当初、床はでこぼこのコンクリートがむき出しのままで、靴をはいて暮らしていた。それがなんだか新鮮で、特別な場所に引っ越したという気がした。当時、私は小学校１年生だった。コンクリート打ち放し、地下１階地上５階建て、ぐるぐると螺旋階段を上っていく空間、バルコニーのある屋根裏部屋のような自分の部屋、すべてがわくわくする家だった。友達がびっくりする家だった。大人たちも、なぜだか大勢やってきた。

反抗期になると、来訪者の質問が面倒くさくて、自分の部屋にこもっていたこともあった。みんななぜ同じような質問をするのか、なぜ同じような答えをもとめるのかつまらなく感じていた。

自分自身が建築を学び始めたとき、父のこだわりが自分の中にも育っていることに気がついた。アメリカに留学し木造の建物に住んでみて、その薄い壁になじめないことに気がついた。家族間の生活の音と他人の生活の音では受け止め方が違うことを経験した。

アメリカから戻って、すぐに塔の家の近所に住まいを探した。でも長押のある洋室がどうしても嫌で、結局塔の家で暮らすことになった。独立を考えてから予算内の気に入った空間に出合うまで２年かかってしまった。

マンション暮らしを経験して、扉１枚で密室になってしまう状況に恐ろしさを感じた。一緒に暮らしていても気配さえ感じないことがどう家族関係に影響を与えるのか。塔の家では感じなかったことに出合い、考えさせられた。

昨年、十数年ぶりに塔の家に戻ってきた。40年近く塔の家に暮らしていた両親と世代交代である。ひさしぶりの塔の家での暮らしは案外変わっていない。いつの間にか、両親が暮らしていた工夫をそのまま引き継いでいることに気がついた。

■街の中に住むことへのこだわり■

両親は大阪の町中育ちである。町には仕事の場があり、住まいがあり、遊び場があり、学ぶ場があった。昼夜の人口の差が大きい郊外住宅地、オフィス街とは違い、人々が24時間入れ替わってはいてもそこにいる。赤ちゃんや子供から老人までいろいろな年齢層の人が住んでおり、働いている。それが町だと考え、その町に住むことにこだわって、塔の家が生まれた。

町の暮らしでは、生活の機能を住まいの中で完結させる必要はない。原稿を書くとき、父は行きつけの喫茶店へでかけた。書斎は喫茶店で十分、庭は公園であったり、街路樹であったりした。窓から見える景色は、四季の移り変わりだけでなく、流行や社会の移り変わりも教えてくれた。町は住まいの一部なのだ。こういった暮らし方は昔の町にも見られたことだったのだろう。大阪の町中育ちの二人が小さいころと同様に町の暮らしを続けたいというこだわりが塔の家をつくり、40年間住み続けることに結びついていった。

■プライバシーとコミュニケーション■

子供のころ「狭くて大変じゃないか？」とか、「階段は危なくないか」とか「扉がなくて大丈夫か」とかよく聞かれた。今でも同様の質問をされることがある。反抗期の私は『シラケ世代』らしく「別に」とか「普通です」とか答えていた。実際、聞かれない限り、そのようなことを考えたこともなかった。６歳から住んでいれば、それが普通としかいいようがない。比較するにも塔の家がベースになるのだから答えようがなかったのだ。

塔の家育ちの私としては、反対にマンションでの暮らしについて、「あんなに窓が少なくて、箱にとじこめられて大丈夫ですか？」とか「扉１枚締めてしまえば密室になってしまう場所で子供がひきこもりにならないようにするのはどうするのですか」とかたくさんの質問がしたくなる。

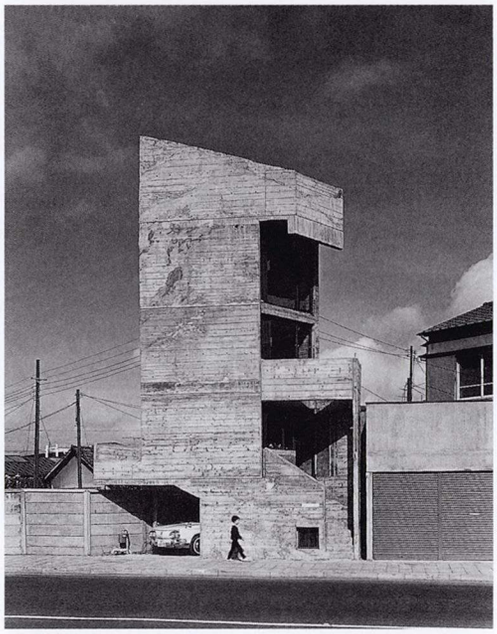
つまり、住まいの絶対的雛形などあるわけもなく、それゆえ、比較してもしようがない。それよりも、そこで暮らしている家族にとって、住空間がどれだけ影響を与えているかを考えるべきではないか。

昔の木造住宅や塔の家と違って、昨今の家の多くは『プライバシー』のために閉鎖的な個室を奨励してきた。しかし、実際は、自室に女性を何年も監禁しても家族が気づかない

ような住まいがある。子供の部屋に何年も入ったことのない親たちがいる。『プライバシーのない』とレッテルのはられた昔の住まいでは考えられない問題だろう。

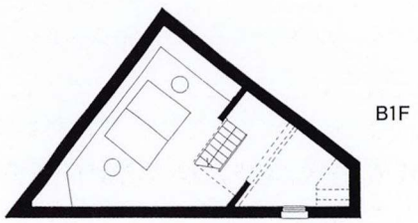
塔の家の親子間のプライバシーは、お互いの暗黙のルールの上に成り立っている。子供部屋には、名前を呼びながら、また、足音で伝えながら上ってくる。子供が下へおりるときも、声や足音が前触れとなる。テレビやラジオの音がうるさければ、うるさいと主張する。話し声がうるさければ、会話に参加する。つまり、コミュニケーションをとらなければ暮らせない空間なのである。

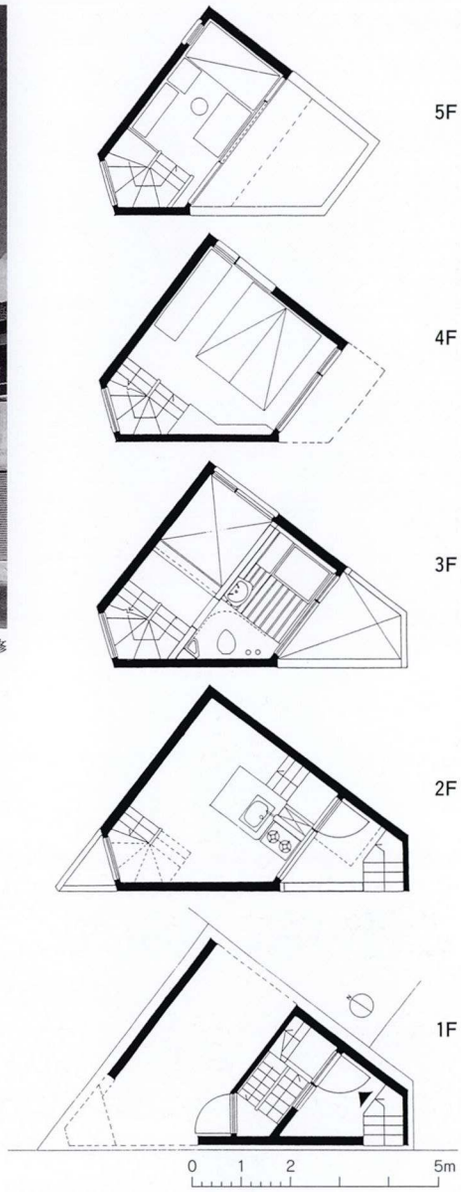
引きこもりなどの現代の問題は、コミュニケーションを簡単に断絶できる住まいにも一因があるように思える。親と子が嫌でもお互い対峙しながら暮らしていくことは決してマイナスではない。



塔の家　　撮影／村井　修

設計　東　孝光
施工　長野建設東京支店
面積　敷地面積20.56㎡
　　建築面積11.80㎡
　　延床面積65.05㎡
構造　鉄筋コンクリート造
規模　地上５階、地下１階
工期　1966年６月～1967年１月





■おおざっぱであることも知恵■

十数年ぶりに塔の家に戻るのに際して、外壁のメンテナンスと内部の改装を行うことにした。外壁のメンテナンスに関しては、雨漏りを完璧に直そうと思ったのである。10年ほど前の外壁補修と同様に、撥水材を塗布し直すことと、雨漏りの原因になっている部分の注入補修を行った。ところが、実際引っ越すと雨漏りはおさまっていない。注入したところの横へ位置を移動しただけである。再度、内部から注入してみたが、また横に移動するのみ。これは、建設会社の名誉のためにいっておくが、メンテナンスの施工が問題なのではなく、当時のコンクリートの打ち方の問題である。手練りのコンクリートを人力で打ったためではないかと思うが、打ち継ぎが多くて粗い。そのため、注入してもきりがないということにやっと気がついた。

結局、雨漏りの位置がわかっていればそのままでいい、家具を動かせばいいという父と同じ結論にいたった。これが、塔の家に住む心得かもしれない。住む上で、雨漏りは大きな問題ではないという我が家の結論である。

■住まいを育てるということ■

当時の造り付けの家具はラワン材であったが、いくつかの家具がその後作り替えられ、シナベニヤになっていた。今回は、オリジナルのベンチ以外のすべての家具をアメリカンチェリーで作り直した。作り替えるにあたって、リビングの家具のみは液晶テレビ対応にするために変更を行っているが、ほとんどの家具はオリジナルのデザイン、寸法をそのままに作っている。

理由としては、塔の家に手を加えるといろいろな方からお叱りをうけるかもしれないと思ったこともないではないが、数十年の暮らしの中から生まれた家具は一番使い勝手がよいからである。実際、引き出しの中の内容まで、両親が使っていた通りになってしまっている。また、壁にかけるコート掛けの位置、家具の横手にかくして取り付けられたフックなど、かなり便利な工夫が母の手によって加えられていた。父が町に住むというこだわりをもっていたのと同様、住まいをつくっていくというこだわりは住まい手の母のものであったのだと思う。

母の工夫のひとつひとつが、40年のあいだに磨きをかけられ、現在の塔の家の暮らしにたどりついていると思うと、住宅というのは建物ができたときが始まりであって、その後何十年もの時をかけて住まい手がつくっていくのだということがよくわかる。塔の家に暮らし続けることで、住まいをつくるということはどういうことなのかを父、母は伝えているのだと思う。

建物ができあがったときに完璧を求めても、人の暮らしは変わるし、社会情勢、技術なども大きく変わっていく。最近、物を買うように住まいの完璧性を求める傾向が強まっているが、完成されていないからこそ成長していけるということを知ってもらいたい。

（あずま　りえ　東 環境・建築研究所代表取締役）

各論 5

子どもの考える こだわりのインテリア

—部屋のモデル制作実験より—

片山勢津子

子どもの好きそうなものと言えば、カラフルな色やキャラクターを配したデザインを想像する。しかし、喜びそうなものにすぐ飽きてつまらないものに夢中になる子どもの姿も経験的に知っている。彼らは一体、何を基準に捉えているのだろう。確かに、子どもは、時として大人には考えられないような自由な発想をする。恐らく大人には理解しがたい視点があるのだろうが、では部屋はどのように見ているのだろうか。

ここでは、筆者らが小中学生を対象に行った部屋のモデル制作実験を紹介して、子どもに内在する空間像について考えてみたい。

調査内容は「僕の部屋、私の部屋」というテーマで、厚紙を使って床と壁3面の部屋の模型を自由に制作してもらうというものである。制作を容易にするため、天井は希望した場合のみ作ってもらうことにし、人・家具・観葉植物などを印刷したケント紙を用意した。画材はクレパス、色鉛筆、ハサミ、のりなど、子どもたちが普段使っている道具を使用した。実施は、学校での授業形式[1]と児童館での個別形式の2方式を採った（表1）。個別形式は、授業形式での一斉方式では困難と判断した小学1、2年生を中心に、補足的に行ったものである。所要時間は、授業形式2～3時間、個別形式は1～2時間であった。

表1　被験者内訳（人）

学年	方法		合計
	授業形式	個別形式	
小学1年生	0	42	42
小学2年生	0	18	18
小学3年生	124	10	134
小学4年生	115	5	120
小学5年生	43	0	43
小学6年生	0	1	1
中学生	19	0	19

■制作風景の学齢差■

実施に際して予想外だったのは、皆が興味を持続して熱心に作業することだった。歩き回ることも騒ぐこともなく、休み時間もとらずに制作を続ける子どもたちが大勢いた。時々聞かれた「本当に、好きなように作っていいの？」という言葉からもわかるように、自由制作に戸惑いながらも各自が個性を発揮し、だれ一人脱落することなく作品を完成させたことは、正直言って驚きであった。

制作風景は学齢によって少しずつ異なる。小学校中学年（3－4年生）の場合、説明が終わるや否や、思いついたところから作業を始め、画材すべての色を使って無心に手を動かす。それが、小学校高学年（5－6年生）になると、手が度々止まるようになる。また、立体的なものを工夫して作る。つまり、手が止まっている間、子どもたちはどうしようかと何やら考えているのだ。さらに、中学生になると作業風景はまた異なる。こちらの説明を終えてから約15分、だれも作業を始めようとしない。どの子もじっくりと何を作るか頭の中で組み立てているようなのである。だから、作業を始めても度々手が止まり、窓の一部などの細部から慎重に作業する。紙を折り曲げたり試し塗りをしたりして考えていることから、完成作品を想像しながら作っていることが窺える。

手を動かしながらひたすら作業する小学生、手を止めてじっと考える中学生。彼らは一体、部屋をどのように捉えているのか、まずは、作品に表現されているものから探ってみたい。

■表現内容の変化■

作品に表現されたものは、およそ7種類に大別できる。開口部、家具、電化製品、モノ（電化製品以外の比較的小さなもの）、アニメ、生き物、その他（階段など開口部以外の家の構成に関するもの）である。モノを電化製品とそれ以外に分けたのは、電化製品が顕著に見られたからである。多くの子どもたちが、アニメや生き物、電化製品を自分の部屋に欲しいと考えていることがわかる。そして、小学生は「モノ」に、中学生は「開口部」にこだわりが見られた。

表現内容は、学齢によって随分異なる。小学校低学年では、アニメや生き物が多く描かれる。そして1年生は色数が少ないが2年生から増え、3年生になると画材すべての色を使ったカラフルな表現に変化し、床や壁に模様が描かれる。また、エアコン、テレビ、冷蔵庫といった電化製品の表現が顕著になる。高学年になると、モノの表現が減少し、代わりにフローリングなどの材料の表現やカーテンなど開口部へ、表現内容が移る。そして、中学生は、格子窓や出窓、トップライトなど

表2　こだわりの変化

学年	こだわりの見られる部分	特徴
小学1年	アニメ、生き物	部屋がまだ捉えられない
2年	モノ(身近なもの)	色数が増える
3年	モノ(電化製品)	天井に興味を持ち始める
	模様	床や壁にパターンを描く
4年	家具	立体物を作る
5年	窓	テクスチャーを表現する
中学生	開口部	開口部の構成に凝る
	全体の構成	全体の構成で捉える

開口部の表現にこだわりを見せる（**表2**）。

開口部の捉え方を、学齢で見ると興味深い。小学校中学年の作品には、他室へのドアを複数描く事例が見られ、関心がドアにあることが窺えるのに対して、小学校高学年頃からは、ドアよりも窓装や窓の外の表現に重点が置かれるのである。特に中学生は、ほぼ全員が窓から作り出す。この表現の変化は、どのように捉えればいいのだろうか。小さいうちは家の中の他室との繋がりに興味が強く、自立し始めると、外部との繋がりを考えるようになるのだろうか。部屋のインテリアを考えているはずなのに、中学生の視点は外へと注がれ、部屋の中で一人ぼんやりと思考する若者の姿を垣間見ることができる。学齢が進むにつれて、室内のモノから他室、そして外部へと視点が変化していくことがわかる。

なお「家の構成に関するモノ」は低学年にのみ見られるもので、上階や屋根、隣室を表現して家を作ってしまう事例である。この時期は部屋の繋がりに興味があるものの、インテリアとしての空間把握は難しいようである。

■発想の性差■

子どもたちの考えていることは、作品を見るだけではなかなかわからない。子どもたちの制作意図を知るために、作品完成後に文章やヒアリングで聞いてみた。ところが、小学生からは「楽しかった」という感想だけが、中学生からは「くつろげる部屋」という漠然とした言葉が返ってきただけだった。どうやら、子どもたちの思考は刹那的で、制作後に聞いただけではわからないようである。そこで、何を作っているかを制作中に聞いてみると、思いがけない答えが返ってきた。表現とその理由を次に記載して、ユニークな発想の一端を紹介する。

これらは、小学3年生男子の説明である。ギャングエイジといわれる時期の男の子の頭の中は空想に満ちあふれ、ヒーローもいれば怪獣もいて、戦争があればジャングルもある。部屋には、時代も空間も飛び越えた壮大な物語が存在する。

きれいな花柄模様の床：ジャングル
赤黒2色の塗り分け：昼と夜のある部屋
壁に等間隔に並ぶスイッチ：爆弾
人物像：泥棒

一方、女子は現実派である。テーブルは「食事用に」あり、カーテンは「光を和らげ、外から見られないように」あり、フローリングは「清潔だから」、というふうにお母さんの言葉が聞こえてくるような説明が聞かれた。もちろん、男子的発想の女の子や女子的発想の男の子がいることは、大人の世界と同じである。

■5つの表現タイプ■

これまで学齢や性別の特徴を述べてきたが、同じ学齢でも表現に見られるこだわりによって、いくつかのタイプに分かれる（**図1**）。

①空想型：物語や空想によって部屋を作る。男子、特に小学3年生を中心に多い。

②もの中心型：部屋に配置するモノを詳細に表現する。小学生を中心に、全体に多く見られる。

③パターン中心型：床や壁に色を使って模様をつける。小学校中学年に多い。

④テクスチャー重視型：床やカーテンの素材にこだわる。小学生高学年と女子に多い。

⑤構成重視型：開口部や天井など、部屋の構成にかかわる部分にこだわる。中学生に多い。

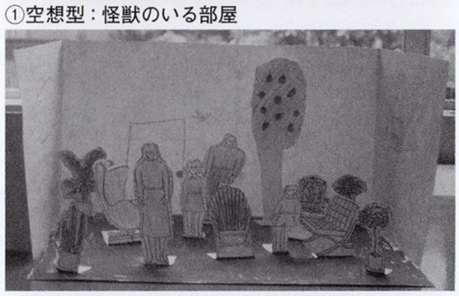
■おわりに■

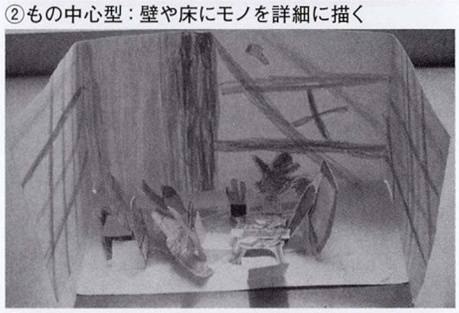
以上は部屋のモデル表現から見た子どものこだわりにすぎないが、年齢とともに視点や思考内容が変化し、性差がかなりあることがわかる。

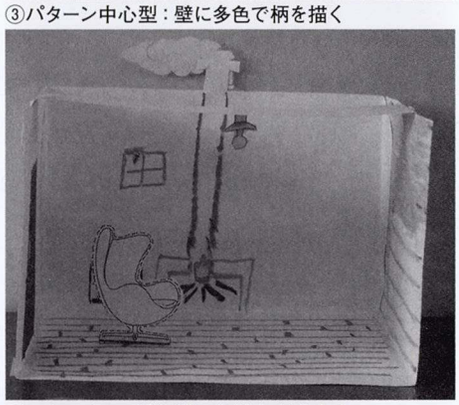
一般に、9歳頃から空間把握の内容が変化し、11〜13歳頃に完成すると言われているが、小学校中学年の子どもたちは特に熱心で、この時期の多様な空間体験が重要だと、調査を通じて痛感した。

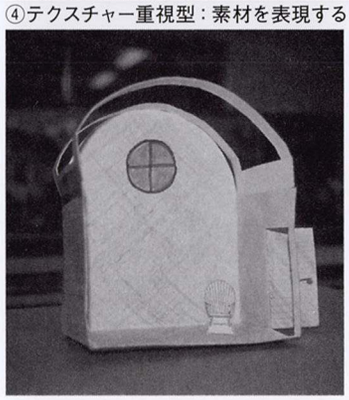
（かたやま　せつこ　京都女子大学准教授、学術博士）


①空想型：怪獣のいる部屋


②もの中心型：壁や床にモノを詳細に描く


③パターン中心型：壁に多色で柄を描く


④テクスチャー重視型：素材を表現する


⑤構成重視型：ドーム型天井にトップライトを作る

作品の特徴による型分類

1）授業は、日本インテリアデザイナー協会教育研究委員会主催で、4校で行った。

各論 6

伝統を見つめていたら、普通の家が見えてきた

宮本繁雄



茅葺き民家

古民家再生工事のなか、伝統構法にふれることで現代の住宅の問題点、課題を考えてみる。私の狭いフィールドである、九州の筑後川流域からの提言である。

■古民家再生の現場から■

築80年から180年ぐらいまでの民家再生工事を手掛けているが、この範囲では、石場建てに足固め（意外と不完全なものも見られる）、桁固め、折置きで、貫3段ないし4段、貫の厚みは7分から9分程度、土壁で田の字形の平面構成である。構造としては、曲げ、せん断系の建物である。土壁の剛さと強度で地震力を受け、土壁が壊れ、柱・梁・貫の軸組が抵抗する。福岡県西方沖地震が起きたときは、福岡県城島町（現久留米市）にて築100年の民家を再生中であった。荒壁と中塗りの混在した状態であった。震度5強の地域である。荒壁に亀裂が入り、古い土壁の仕上げの土は剥落したが、ほかには損傷はなかった。押入の中段は、抵抗要素となっていた。立て掛けていた材料が倒れ、灯籠が倒れただけの被害で済んだ。土壁の剛性はかなり強いと実感した。

限界耐力計算のとき、筋交い・面材は1／30が安全限界であるが、土壁・貫は1／15以上の変形能力がある。この1／15をどう見るかで、構造設計の考え方が変わる。伝統民家で学んだ構造のひとつに、傾いても倒壊しない、倒壊しなければ生命維持空間が保てるという考え方がある。今つくっている新築住宅でも土台は120×210の杉の赤身に、通しのほぞで込み栓18㎜φの2段打ち、6分の貫を5段入れて、内外ともに土壁仕様としている。告示が変わり、土壁の壁倍率が上がったことで、壁量計算でも筋交い・面材ではなく、土壁仕様の家をつくることが可能になることもある。限界耐力計算で建てた家がもうすぐ完成するが、そこは外壁土壁、内部は厚さ27㎜の貫を5段入れている。そのときの安全限界は1／22であった。今回の法改正において安全限界1／30と決められたことでどうなるか、様子見の段階である。伝統構造のメカニズムが最近の研究で徐々に明らかにされてきている。法にも反映してもらいたいものである。

伝統はリデザインの繰り返しであった。今も、引き継ぎ続ける必要性を感じる。構造の耐久性とともに、機能の耐久性、これは融通性であろう。構造と表裏であろうが、田の字形の囲う形態が機能の融通性を生み、民家を100年持たせてくれたと考える。100年と言えば、4世代が暮らせる期間である。戦後60年の中にあっても民家が生き続けられたのは、機能の変化に対応できたからであろう。竈がプロパンガスになり、台所が床に上がった。農業の変化で土間はなくなり、町も農村も生活の仕方に変わりはなくなったが、その変化に対応できてきた。現代の規格化された住宅は機能の融通性を持ち、100年に耐えきれるのだろうか。田の字形の架構だからこそ、民家の再生を可能にしてきたと考える。

■地元産素材を、地元職人を使って…■

次に民家の素材を見てみる。屋根材は、瓦の場合は垂木の上に竹を載せ、杉皮の上に土、そして地元の瓦を葺いている。高級な場合が板葺きに瓦である。茅葺きは一般的に佐賀県鹿島地方は葦葺き、筑後川は小麦藁、山間部がススキ、一部ではススキ葺きの上に杉皮葺きとなっている。

平成13年に福岡県黒木町（中間山地）の茅葺き民家の調査に参加したとき、60戸の民家の中でススキ葺きは1戸で、後は藁葺きであった。その隣の星野村では、ススキ葺きの上に杉皮葺きである。この八女地方の杉皮は戦後である。ススキは屋根材として使用され、牛馬の敷き草として、肥料として見事な循環が行われてきたが、農業の機械化・化学肥料の普及の中で循環は止まった。そして、戦後の拡大造林の中で、茅場や棚田も杉の林に変わった。大量に伐採された杉の皮がススキの屋根の上に葺かれ、茅葺きを守ってきた。杉皮を葺く技術は、大分県日田地方・玖珠地方には昔からあり、一山を越えて八女地方にやってきたのだ。

民家の素材は地域と時代性とで変化しているが、共通しているのは、地元の素材である葦・藁・ススキ、地元の土での瓦、下地材としての竹、仕上げ材としての竹・土・和紙・畳、塗装材としての柿渋と、太陽の恵みによる自然素材、土に還る素材であり、地元の職人の手による仕事である。九州は杉の一大生

産地である。照葉樹林帯である。民家に使われている材は、杉が圧倒的に多く、柱は杉、梁は松である。熊本地方では松、せんだん、杉となる。鹿児島地方では杉梁が多くなる。大黒柱には欅、樫、椎が使われている。敷居は樫が多い。これも地域性であろう。この山も今は手入れされている山が少なく、竹の侵食を許している。山のことを考えるときに間伐材利用が盛んに言われるが、流通段階で使用されているパレットは外材である。これを杉材に代えるだけでも、と考える。

■森の世代交代■

日本の森林の年間成長量は全蓄積の約３％強、年間伐採量は約１％であるので、木材資源の蓄積は増えている。それも35年以上の面積区分が多く、若い森林が少ない。民家に見られる大径材の伐採がないと、森の世代交代が行われない。大径材の柱・梁を使った曲げ系の構造の普及が、必要な時を迎えていると考える。人吉地方の話で、相続税の支払いのために、山を皆伐した、当然植林する余力はない。そのために土砂崩れを起こし、その復旧に何億もの税金が投入されたと聞く。山を守るためには、税制をも含めて考えるべきだと思う。

山では立派な大径材も、集成材のラミナにされている。国産材の推進という美名のもとでである。林野庁の進める新生産システムにおいて、小さな製材業者はどうなるのであろうか。このシステムでは、小さな製材業者は補助金の対象外におかれる。生産地と住まい手の顔の見える関係を築くためには、現代の木挽き棟梁である製材所の丸太を加工して適材適所の用材づくりをする技術は、その橋渡しとしても重要性を増している。この関係を途絶えさせてはいけない。

■九州の風土と民家■

九州のこの地は高温多湿で雨も多く、台風も年中行事である。1991年に上陸した台風17号と19号は、この筑後地方に大きな爪あとを残した。全九州の36%の世帯が停電する結果となった。上棟後の家が倒れ、梁が割箸みたいに飛んでいく。瓦は紙みたいに飛び、ブルーシートに覆われた。コンクリートの電柱も折れ、道路を塞いでしまった。山は、倒木で痛々しい姿となった。この地では台風対策は避けられない。雨戸・格子は必須で、風対策と雨仕舞いには万全の備えを要する。

暑さ対策では、茅葺き屋根は遮熱材であり、深い軒、庇で温度を下げている。しかし材料の吸放湿性で夏は涼しいが、冬は寒い。熱の損失があまりに大きい。民家の再生では床の断熱・気密を施し、窓からの熱損失を少なくするように、木製のペアガラスを多用している。

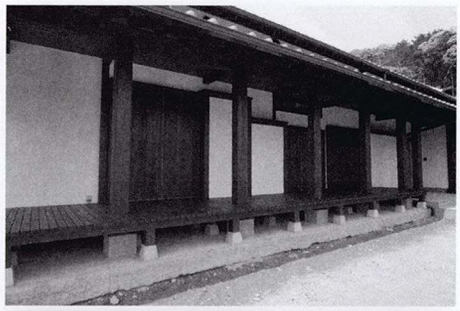
九州の民家は、圧倒的に直家が多いが、佐賀県の有明海沿岸ではくど造りがほとんどである。寄せ棟、鍵屋、分棟型といろいろである。現代の住宅のデザインを考えたとき、地域性・風土性があるのだろうかと疑問を感じる。今のデザインが100年の時に耐えるのだろうかと。構造の耐久性・機能の融通性は当然としても、デザインの耐久性とは何であろうかと思う。

今、商品として住まいが売られ、買われている。ある住宅メーカーのテレビの宣伝に、奈良県の今井町が出ている。ここには、住む人の家族の繋がり、地域の繋がりが見えるし、環境の配慮も見えるが、それは住宅メーカーのつくるものではない。今、力のある住宅メーカーのリーダーシップと責任が問われている。

■「普通の家」を建てる■

今、私が建てている普通の家のことを記す。

構造は大径材を若き木挽き棟梁に手配してもらう。日田杉・小国杉と筑後川流域の木である。この木を社員大工７人が墨付けをし、刻んでいく。曲げ、せん断系の貫と土壁の家である。母屋の上に厚さ30の杉の本実加工の板を張り、垂木の間に珪藻土（大分県九重町産）と籾殻を混ぜたものを載せ、この間に空気層を取り、屋根通気をする。壁は土壁で、内部は真壁が多い。外壁には同じく杉の30厚の板を張り、断熱としている。土は福岡県久山町の土の使用が多い。建具材はすべてが杉材である。クロス貼りはない。この仕様でも、住宅メーカーの建物と同等か、安く出来ている。地域の大工力や工務店の力が落ちているなか、職人の技術の伝承がなくなることを危惧する。佐賀県の建具組合員は、17年前は150人、今は80人、10年後には50人となる。左官も腕のいい職人がアルミフェンスを組み立てている。小舞がかけて、土壁漆喰が塗れる職人が減少している。プレカットの流れのなかで、増築工事が出来ない若い大工が増えている。60年かけて変えたものを戻すのにどれくらいを要するのだろうか。





再生民家―外観(上)、居間(下)―

私が考える普通の家は、「伝統は日々新たなり」の言葉通りに、尊重しながら変えていくことであり、顔の見える関係から創りだされる協働の家づくりである。それが家族や地域の繋がりが豊かになる絆を強める家、エコロジーな暮らしを生み出し、環境保全の家づくり、繋がり、町のなかに森をつくりだす。地球温暖化防止の家づくりである。

人類のDNAには、存亡の危機を乗り切るプログラムが内在しているという。「今の文化の中で、一番恐ろしいのは、みんな後ずさりを始めていることである」（宮本常一）。

（みやもと　しげお　建築工房悠山想代表取締役、
日本民家再生リサイクル協会理事、九州民家塾長）

「建築と社会」誌

特集一覧●1985〜2006

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1985 vol.66	●大阪湾物語＊	●東海の現在と近未来	●自由様式への道—建築家安井武雄 ●建築物の基礎を考える	●情報化をめぐる建築・都市事情	●ホール—それが生みだす文化—	●建物の表情—最近の外壁材料	●大阪国際見本市新会場	●建築と水の演出 ●神戸研究学園都市	●都市と健康・スポーツ	●接合—人体と建築にみる— ●日建設計作品＊	●村野藤吾の一断章 ●伊勢湾をめぐる東海	●第32回青年技術者
1986 vol.67	●これからの住空間—都市型集合住宅にみる	●屋根—そのデザインと素材	●現代デザイン—ポストモダニズム10年 ●これからの防水工法	●インテリジェントビルの建築・設備計画	●自治体営繕と公共建築	●建築防災と法 ●大阪市庁舎（第2期）	●21世紀の住宅と設備	●開発—その創造的仕掛けの鍵をもとめて— ●ツイン21	●CAD—その応用と展開	●オフィス空間の構成	●第33回青年技術者	●インテリア・イクステンションとリニューアル
1987 vol.68	●入浴物語	●腐食	●創立70周年記念号	●躍動する東海へ	●貯蔵・保管施設 ●大阪府立体育会館	●室内の仕上床	●駅	●行政建築家の可能性	●シティホテルの設備	●宝塚の街づくり＊	●建物と町並みの接点 ●昭和設計作品集	●第34回青年技術者
1988 vol.69	●ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統—東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	●建物の外装リフレッシュ＊	●都心居住	●中国地方の展望とひろしまのまちなみ	●21世紀への照明＊	●制振＊	●超高層住宅を考える	●集合住宅のリフレッシュ＊ ●大阪府営善	●第35回青年技術者 ●800号記念＊	●讀賣テレビ
1989 vol.70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術＊	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備I	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	●都市環境創造と設備II ●ユーザー参加のハウジング	●第36回青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 vol.71	●商品化住宅のデザイン＊	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●佐賀市文化会館＊	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識—中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化—設計の多様化をめざして—＊	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営緒の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観＊	●高級感—建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 vol.72	●新しい都市空間づくり—I—	●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくり—II— ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識—複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	●一般号＊	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木—構造技術の世界— ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 vol.73	●夢物語—人がかわる、まちがかわる—	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザイン—東海支部—＊	●建築家のための設備知識—集合高層住宅の設備システム—	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り—住宅・都市整備公団関西支社10周年—	●木構造を使ってみませんか—集成材による構造—＊	●接着—建築分野への限りなき可能性	●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」＊	●屋台一仮設の魅力に学ぶ— ●ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているか	●京のかたちと色
1993 vol.74	●第39回青年技術者 ●東畑建築事務所創立60周年記念作品集	●大阪府営緒	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境—限りある自然と建築とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生—構造技術の役割— ●大阪市営緒	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境—人にやさしい空間創造をめざして
1994 vol.75	●コピー文化の新時代 ●広島の街創りアジア競技大会	●九州のインスタレーションと貌	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈＊	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かって—会員作品＊	●いま、医療施設は	●住空間における居どころへの視点	●まちなかの看板 ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美—建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回青年技術者 ●関西国際空港
1995 vol.76	●光がつくる風合の世界＊	●音—騒音から操音/創音へ	●飛騨・美濃—まちの活性化と地方文化＊	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法—会員作品	●新しい「都市・建築」の視点＊	●建築構造と社会の接点 ●日建設計＊	●ライフラインと建築設備＊	●第42回青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 vol.77	●阪神大震災から学ぶ＊	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念＊	●遠江—その地方振興と文化＊	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害！非常時に生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営繕部
1997 vol.78	●建築のロングライフ化をめざして	●鉄ものがたり＊	●東海支部会員作品 ●金沢・能登—風土・文化とまちなみ・建築＊	●創立80周年記念/建築と私と社会—80人の眼—＊	●木造建築物の伝統技術とその将来	●住む空間の復興—法・制度の運用と新たな展開へ ●住都公団関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市整備公団改革への提言	●クロスワード都市OSAKA＊	●モザイク都市の住むかたち ●昭和設計40周年	●私の空間作法—会員作品—	●第44回青年技術者 ●京都駅ビル
1998 vol.79	●新しいまちづくりの予感 ●東畑建築事務所創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、そして建築	●東海支部会員作品 ●信州—諏訪とその周辺—	●街並みの演出—最近の外構材料	●生活環境の安全・安心	●地球環境保全と建築	●心と体を元気にするインテリア	●建築設備—ビルメンテナンスの立場から	●建築への証言'98—21世紀に向けて	●ゆれをとめる—たえる技術からかわす技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療施設	●第45回青年技術者 ●駅とともに歩んだJR西日本の12年
1999 vol.80	●“らしさ”のデザイン ●建築を綾どる小粋なモノの仕掛人	●大阪市都市整備局	●東海支部会員作品'99 ●北信濃—街並み修景と地域文化の再構築	●都市のパブリック	●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	●大阪城天守閣平成の大改修	●改正建築基準法—まちづくり・すまいづくりへの展開—	●私の目でみた環境問題	●アーバンインテリア—都市空間としてのインテリア	●木とともに	●私の空間作法	●第46回青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザインの動向を見る ●安井建築設計事務所創業75周年	●中国支部—しまなみ海道と中国地方の街づくり—	●東海支部会員作品2000 ●越中・富山—地域文化の振興と新たな施設づくりの流れ	●こころを癒す環境デザイン	●測る—測定方法と測定結果が意味するもの—	●スケルトン&インフィル	●改正建築基準法—パートII—	●100年後へのメッセージ ●日建設計創業100周年	●来世紀に引き継ぐ—わざ、もの、こころ—	●時間	●私の空間作法—会員作品— ●21世紀の高齢者の居住環境	●第47回青年技術者
2001 vol.82	●エヌ・ティ・ティファシリティーズ	●21世紀の建築設計教育	●東海支部会員作品 ●岐阜・大垣	●IT社会におけるきずな	●自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	●成熟社会をささえるまちづくり	●現代の日本の空間・文化を探る	●環境—近未来に向けて今できること— ●大建設計—作品特集1996〜2001—	●建築の力都市の力	●緊張 ●都市基盤整備公団関西支社	●私の空間作法—会員作品—	●第48回青年技術者 ●NHK大阪放送会館・大阪歴史博物館＊
2002 vol.83	●国土交通省近畿地方整備局営繕部＊	●再生・リサイクル	●東海支部会員作品 ●愛知・名古屋	●生活環境の安全・安心—パート2—	●塗装のいろいろ	●都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	●いま、インテリアデザインは ●漆町リバープレイス	●建築をささえるセンサー	●建築とボランティア	●時を超えて〜サステナブルエンジニアリングの現在〜	●私の空間作法—会員作品—	●第49回青年技術者 ●大阪市中央公会堂
2003 vol.84	●東畑建築事務所創立70周年	●九州の地域づくり・まちづくり	●東海支部会員作品2003 ●愛知・名古屋—この地の文化・芸術と建築・街づくりを考える—	●サスティナビリティ〜次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン〜	●建築と五感	●都市計画法及び建築基準法等の改正	●コンバージョン—インテリアから発信するまちなみ—	●介護と建築・設備	●建築とノスタルジー—建築の主観的価値について〜	●力と楽しくつき合う方法	●私の空間作法—会員作品—	●第50回青年技術者＋青年技術者顕彰50年
2004 vol.85	●大阪市住宅局	●都市緑化	●東海支部会員作品 ●愛・地球博＊	●省リスクな「まち再生」＊	●リニューアルの技	●地域住民主体のまちづくりと支援制度	●Product Design＋1	●銭湯〜心地よさを求めて〜	●建築家とは何か	●巨大地震にそなえて	●私の空間作法—会員作品—	●第51回青年技術者
2005 vol.86	●震災から10年	●「健やか」 ●長崎医療センター	●東海支部会員作品2005 ●東海における施設づくりへの新たな試み	●建築の経済化	●住まい方の変化	●人工栽培	●次世代に伝える「木」の建築 ●「建築と社会」1000号記念	●改正建築基準法と景観緑三法	●火災から守る	●構造の過去から未来へ＊	●私の空間作法—会員作品—	●第52回青年技術者
2006 vol.87	●都市環境デザインと参加のまちづくり	●「地方空港の時代」〜まちと共存する空港づくり〜	●東海支部会員作品2006＋東海支部特集3部作＊	●都市再生の本質〜光と影のはざまで〜	●変容する家族形態とあたらしいライフスタイル	●身近な省エネルギー〜エネルギーをたくわえ、有効利用する〜	●設計図が伝えるもの	●建築物の安全・安心＊	●第53回青年技術者	●「セキュリティ」	●もしも…〜構造が未来へつなぐ夢〜	●私の空間作法—会員作品—

＊は欠号

438

法令コーナー

建築基準法の改正

谷本和子

堺市建築都市局開発調整部指導監察課

建築基準法改正の背景<構造計算書偽装問題>

平成17年11月、本来法令を遵守すべき資格者である一級建築士が構造計算書を偽装していたことが明らかになった。設計図書の作成、建築確認、工事施工のそれぞれの段階で、元請け設計者、指定確認検査機関、建築主事等のいずれにおいてもそれらは発覚することなく、耐震性に大きな問題のあるマンションが多数市場に出回るに至った。このことは建築確認・検査制度等への信頼を失墜させ、建築物の耐震性に対する不安と建築界に対する不信を、多くの国民が抱くこととなった。

このような中、建築基準法及び建築士法を中心とする建築物の安全性確保のための制度について総点検を行い、早急に諸課題を検証し再発防止策を講じることが求められた。また国民が安心して住宅取得や建築物の利用ができるよう、消費者保護のための措置についても合わせて検討することが求められた。

それらを踏まえ、社会資本整備審議会建築分科会に基本制度部会が設置され、次のような課題の検証がなされた。

①建築行政の課題

・複数の指定確認検査機関及び地方公共団体において構造計算書偽装が見逃された。

・偽装内容の中には見破るのが困難なものもあり、膨大なデータを扱いながらも迅速さが求められる構造審査の難しさが認識された。

・指定確認検査機関の、業務・人員体制等の適正性が問われた。

・指定確認検査機関に対する十分な監督権限が特定行政庁にはない。

②建築士制度の課題

・一部の建築士の資質・能力・モラルの低下。

・建築物の複雑化が進むに従い、設計・工事監理業務も専門分化・重層化しており、構造設計の責任の所在が不明確となっている。

③消費者保護の課題

・住宅の品質確保の促進等に関する法律において、10年間の瑕疵担保責任が売り主等に義務付けられたが、事業主は十分な補償能力を備えておらず、瑕疵担保責任が適正に履行されなかったため、消費者は極度に不安定な状態に陥ることになった。

これらの課題に対する改善策の検討を踏まえ、国交省より「建築物の安全性の確保を図るための建築基準法等の一部を改正する法律案」が国会に提出され、平成18年６月に成立した。これは今回の事件で明らかになった建築・住宅業界を取り巻く法令上・制度上の課題への対応策の第一弾として、建築行政側の課題の改善を図ったものである。

建築基準法の改正

今回の建築基準法の改正により、建築行政側の審査体制の強化が図られた。

●構造審査の厳格化

一定規模以上の建築物については、知事または新しく設けられる指定構造計算適合性判定機関の専門家による審査（ピアチェック）が義務付けられる。対象となる建築物は、鉄筋コンクリート造・鉄骨鉄筋コンクリート造では高さ20m超、鉄骨造では地階を除く階数が４以上、木造では高さ13m超または軒の高さ９m超などの大規模な建築物、このほか構造計算が必要な規模で大臣認定プログラムを用いたもの、限界耐力計算を用いたものなどである。構造計算適合性判定は確認申請を受け付けた特定行政庁または指定確認検査機関から判定を依頼するもので、構造設計について工学的判断の妥当性を判定するなど、第三者の視点でチェックが行われる。

また、構造計算プログラムの大臣認定制度が大きく変わる。構造計算プログラムが新たに定義され、施行日以降は、この新認定プログラムのみが大臣認定プログラムの扱いとなる。

●確認審査等に関する指針

確認の審査方法、中間・完了検査の検査方法の指針が告示で定められ、今後はこの指針に基づいて行われる。例えば建築確認の申請受理時、定められた提出図書が過不足なく添付されているかどうか、正本と副本の整合性、設計者の資格なども確認する。確認審査においても公正かつ的確な実施のための措置が定められており、図書の差し替え、訂正による申請書の変更は、誤字、脱字等の軽微な訂正を除き一切認められない。建築基準関係規定に適合しているかを決定できない場合は、申請者に不明な点を説明する図書を求める旨を規定しており、記載事項に不整合や誤りがある場合は、建築基準関係規定に適合しないものまたは適合するかどうかを決定できないものとして取り扱われる。そのほか確認審査中の計画変更も認められないなどの規定があり、国交省は審査を厳格化する立場から不備のある申請に対しては原則不適合の措置を求めている。指針は中間検査・完了検査の方法についても定めており、その内容も厳格な対応を求めるものである。そして従来は各特定行政庁で定めていた中間検査であるが、３階建て以上の共同住宅については一律に法律で中間検査が義務付けられた。

また上記で述べた構造計算適合性判定の制度・建築確認の審査の厳格化に伴い、建築確認の審査期間が延長される。構造計算適合性判定に要する期間は14日以内、合理的な理由があれば最長49日まで延長が可能である。これに伴い建築確認の法定審査期間も21日から35日に延長され、35日の範囲で延長できるため最長で審査期間は70日となる。

●指定確認検査機関の業務の適正化

指定確認検査機関の損害賠償責任能力や適正な人員体制など、指定要件の強化が図られ、損害賠償能力については情報開示が義務付けられた。これは、指定確認検査機関に自らの責任において業務を遂行させることを明確にするものである。また、国や都道府県が指定確認検査機関を指定する際の審査方法・体制等、指定についても厳格化された。さらに特定行政庁に指定確認検査機関への立入検査権限を付与するなど、特定行政庁による指導監督を強化した。特定行政庁は指定権者である国や都道府県と協力して実効的な監督体制を整備し、今回の事件で生じた国民の不安を解消していくことに努めなくてはならない。

●図書保存の義務付け等

指定確認検査機関及び建築士事務所に対し、確認申請書等の図書保存期間を大幅に延長した。また、特定行政庁に対しても、同様に一定期間確認図書の保存を義務付けた。

今後の制度改正

法令・制度の整備の第二弾では、建築士制度の改善が図られる。すでに建築士法等の一部を改正する法律が平成18年12月20日に公布されており、２年以内に施行される。第三弾は消費者保護の制度である。特定住宅瑕疵担保責任の履行の確保等に関する法律が整備されていくこととなる。

この３段階の制度改正によって、建築業界を取り巻く制度は大きく変化していくであろう。大変革のキーワードは『適正化』『厳格化』。建築の実務にも大きな影響を与えることが予想され、今後も情報収集等、注意が必要である。

（たにもと　かずこ）

365
設備の頁

CASBEE
—大阪市の誘導の狙い—

薄木三男
大阪市計画調整局建築指導部建築企画担当

大阪市では、持続可能な社会の実現に向け、快適で環境に配慮した建築物の建設の促進を図るため、平成16年5月に「CASBEE大阪」（大阪市建築物総合環境評価制度）を創設（同年10月施行）し、これまでに186件の公表を行っている。

本稿では、本制度により大阪市が目指す方向性とその実現のための取り組みについてご紹介する。

CASBEE大阪の独自の取り組み

●緑化への取り組み評価の重点化
・都市化が進み、緑地等が比較的少ない市域の特性を踏まえ、市街地環境の向上やヒートアイランド現象の緩和等を図るため
・Q−3の室外環境（敷地内）の、重み係数の引き上げ
●総合設計制度の許可要件化
・総合設計制度を適用する場合の要件として、サステナビリティランキングB+以上を要件化している。
●補助事業における採択要件化
・優良環境住宅整備事業において、サステナビリティランキングA以上を採択要件とし、環境上優良な住宅建設を支援している。
●顕彰制度『CASBEE大阪 OF THE YEAR』
・平成18年度創設

CASBEEの概要

室内環境をはじめとした建築物の内部や敷地内における環境の品質・性能（Q）と、エネルギー消費をはじめとした建築物による外部への環境負荷（L）を統合した指標として環境性能効率という数値を用いて総合的に評価する。（図1参照）

CASBEE大阪の公表実績

①CASBEE大阪全体では、図2のとおり。
②総合設計制度適用建築物では、図3のとおり。

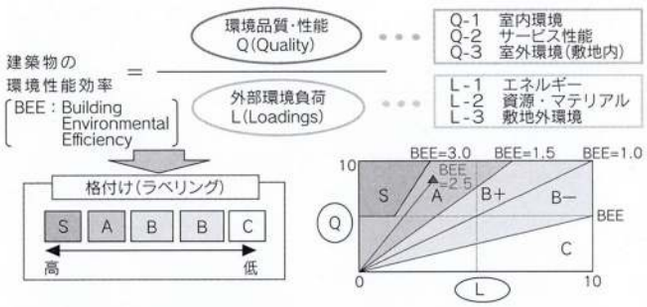


図1
環境性能効率（BEE）については、環境の品質・性能（Q）を向上させる、または外部への環境負荷（L）を低減するほど高くなる。

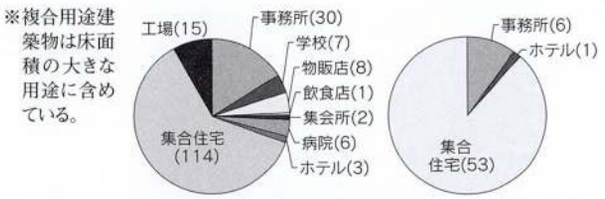
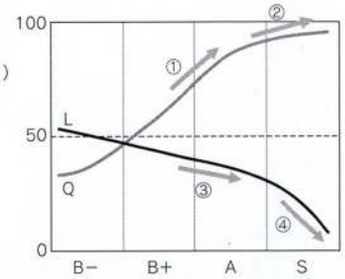


図2
平成16〜18年度CASBEE大阪全体の用途別、ランク別集計

ランク / 建物用途	S	A	B+	B-	合計
事務所	5	11	12	2	30
学校	1	2	3	1	7
物販店	0	1	5	2	8
飲食店	0	0	1	0	1
集会所	0	0	0	2	2
病院	0	0	5	1	6
ホテル	0	0	3	0	3
集合住宅	0	32	74	8	114
工場	0	3	5	7	15
合計	6	49	108	23	186

ランク / 建物用途	S	A	B+	合計
事務所	2	2	2	6
ホテル	0	0	1	1
集合住宅	0	17	36	53
合計	2	19	39	60

図3　平成16〜18年度総合設計制度適用建築物の用途別、ランク別集計



【Q】ランクが上がるとともにQ（室内環境等）は上昇するが、一定ランク以上では大きな変化はみられない傾向にある。
【L】ランクが上がるとL（外部環境負荷）が徐々に小さくなり、Sランクになると急激に小さくなる傾向にある。

図4　ランクとQ，Lとの関係

CASBEE大阪ランクとQ，L値

CASBEE大阪でA、Sランクとなる建築物はどのような配慮がされているのか、図4の傾きと合わせて、具体例を以下に述べる。

平均的なB+の建築物は、「関係法令の基準に適合している」「一般的な社会要求レベルは満たしている」建築物と言える。
・緑化率5〜10%程度
・照明・空調設備等はある程度ゾーニングして制御している。
・プラスアルファの配慮（更新用スペースを設ける、空間・強度等に余裕を持たせて計画するなど）は行われていない。

A、Sの建築物では、以下の取り組みが行われている。

【Q】（室内環境等）

①緑化率の増加、連続して緑地を配置

CASBEE大阪では、緑地への取り組みを重点的に評価しているため、緑地の増化とともにQ値が大きくなっている。

②更新時への配慮、防災対策の充実

設備も含めた、地震に対する安全性や、耐用年数の長い材料を使用するなど、建築物を永く使い続けられるよう配慮されている。

【L値】（外部環境負荷）

③再生材の利用、敷地外環境に対する配慮

建設段階における資源消費の削減、日照・風害に対する配慮や排熱量を低減する取り組み等が行われている。

④高度な省エネルギー対策、自然エネルギーの利用、運用管理体制の充実

省エネルギー対策や自然エネルギーを積極的に利用するなど、建築物を運用する際のエネルギー負荷を低減する取り組みや、運用管理体制を充実させ、より効率的に設備を運用できるような取り組みが行われている。

A・Sランクへの誘導方策

CASBEE大阪では、緑化に対する重み係数の引き上げ、総合設計制度を適用する場合に公開空地内の緑化率を義務付けるなど、敷地内緑化を積極的に誘導することにより、環境・品質の向上を図っている。

制度実施以降の実績の分析から見ると、評価の高いものについてはQ（室内環境等）、L（外部環境負荷）ともに、取り組み程度も大きくなっている。仮にQへの取り組みが中間的であっても、Lの取り組みが大きなものであればランクは上がると思われるが、Lのみを大きくすることについては、建築設備などへの取り組みを大きくすることが重要な要素と思われ、これらの対応をする上で、経済性などの側面から種々の課題も考えられる。

このため、これまでの実績等を踏まえ、評価項目ごとの課題の明確化、関連した施策などとの連携を図るなどを含めた評価のあり方を検討することが必要であると考えている。

なお、A・Sランクの建築物を誘導する場合においては、建築物の環境・品質（Q）の向上と外部への環境負荷（L）の低減に対する取り組みをバランスの取れたものとすることも、誘導する上で留意する必要があるのではないかと思われる。（うすき　みつお）

お知らせ information

▶「見果てぬ夢―日本近代画家の絶筆」展

本展では、明治から現代にいたるまで、我が国で活躍した著名な洋画家および日本画家約100人を選び出し（日本画約20点、洋画約80点）、それぞれがしの直前に描いた作品を一同に紹介する。あえて「絶筆」を定義づけたり分類したりせず、それぞれの画家が士の直前に描いた作品を出来る限り多く集めることで、「絶筆」の多様性を浮き上がらせたいと考えている。

会　期　2007年5月29日～**7**月**8**日(日)
10：00～18：00
会　場　兵庫県立美術館　企画展示室
神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1
TEL078-262-0901
観覧料　一般1,200円、大高生900円、
中小生500円
招待券は日本建築協会(TEL 06-6946-6981)へ。

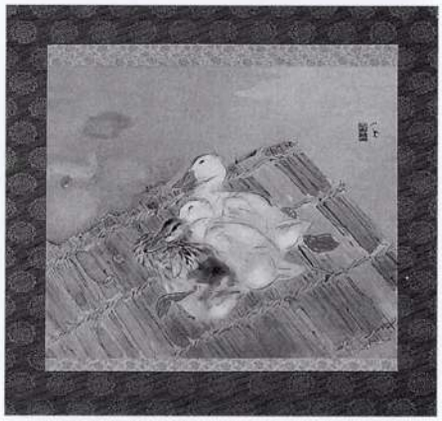


黒田清輝《梅林》 1924年　油彩・板
東京国立博物館蔵　写真提供：東京文化財研究所
写真撮影：東京文化財研究所企画情報部　城野誠治

▶企画展　「松園が学んだ三人の師」

60年にわたる画業において格調高い美人画を描き続け、現代日本画壇に輝かしい足跡を残した上村松園。今なお人気を博す松園芸術の真髄を探るため、本展では松園が学んだ三人の師（鈴木松年・幸野楳嶺・竹内栖鳳）に焦点を当てて作品を紹介する。
それぞれ気質も、画風も異なる三人の画家だが、彼らの元で研鑽を積んだ松園にとって、三人の師各々がなくてはならない大切な存在であったに違いない。本展では、三人の作品を通して、松園へと受け継がれた美の本質をご覧いただく。

会　期　2007年6月2日(土)～**7**月**16**日(月)
10：00～17：00　月曜休み（祝日は開館）
会　場　松伯美術館
奈良市登美ヶ丘2-1-4
0742-41-6666
入館料　大人800円、中小生400円、
展　示　鈴木松年：「四仙之図」「十六羅漢図」
幸野楳嶺：「霖雨図」「妓女図」
「仙洞御苑春景図」
竹内栖鳳：「古城松翠」「風薫双塔寺」
「千代田城」



竹内栖鳳《朝寒》 昭和12年(1937年)　個人蔵

▶Art Court Frontier 2007 #5

アートコートギャラリーのアニュアル企画として2003年より開催し今年で5回目を迎える展覧会である。
関西在住の気鋭作家12名を美術界の第一線で活躍中のアーティスト、キュレーター/アートクリティック、ジャーナリスト/アートライター、そしてコレクター/美術愛好家の各4領域の方々が各1作家を推挙する。

会　期　2007年**6**月**29**日(金)～**7**月**14**日(土)
(日・月曜休み)
会　場　OAPアートコート
大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F
11：00～19：00（土：17：00まで）
問合せ　06-6354-5444　（八木・大場）
○イベント：ギャラリートーク6月30日(土)、7月7日（土）14：00～16：00（両日）
出展作家によるプレゼンテーション+推薦者とのディスカッション。
参加費/500円（ドリンクサービス有り、要予約）

▶バードハウス展

アメリカでは古くから小鳥をフェザード・フレンド（翼を持つ友人）と名づけ、友人を招くためのゲストハウスという意味を込めてバードハウスと呼ばれている。バードハウスを作り架けることは、環境に対する意識の変化を促すことに加え、色彩豊かな表情は視覚的にも楽しめ、さらにバードハウスがあることによって生活に憩いや潤いが生まれるなど、領域の広さも感じることが出来る。本展では、バードハウスという自然と人間が共生するための役割りを担う小さな建築を紹介する。

会　期　2007年6月8日(金)～8月24日(金)
10：00～18：00
(水曜、8/11-16休み)
会　場　INAXギャラリー大阪
大阪市中央区久太郎町4-1-3
伊藤忠ビル1F
TEL06-6733-1790
入場料　無料

▶第21回「大阪市ハウジングデザイン賞」推薦募集

■募集期間
平成19年6月1日(金)～6月30日(土)
■審査対象
平成14年4月1日～平成19年5月31日までの間に完成した市内の民間（分譲・賃貸）マンションで、デザイン、住み心地や人にやさしいすまいづくりの観点から優れているもの。
■推薦方法
各区役所、大阪市サービスカウンター(梅田、難波、天王寺)、住まい情報センター住情報プラザ、大阪市ハウ情報コーナー（市役所1階）等にある推薦ハガキ付きリーフレットに必要事項を記入の上、郵送。
■問合せ
都市整備局企画部民間住宅助成担当
TEL06-6208-9225

▶平成19年度建設リサイクル法説明会(第1回)

建設リサイクル法、アスベスト関係法、建築物の環境配慮制度に関する説明会を行う。
日　時　2007年7月13日(金)
13：30～16：30
会　場　大阪府庁新別館北館4階多目的ホール
大阪市中央区大手前3-1-43
問合せ　大阪府住宅まちづくり部建築指導室
審査指導課建築環境・設備グループ
TEL 06-6941-0351（内線4320）

▶病院建築基礎講座/福祉建築基礎講座

㈳日本医療福祉建築協会が毎年開催してる標記講座は、1日目は初心者を対象に基礎知識を平易に解説、2日目は事例・応用として最新情報を提供する。
会　期　病院：2007年7月10日(火)・11日(水)
福祉：2007年7月12日(木)
会　場　建築会館ホール
東京都港区芝5-26-20
定　員　180名（定員になり次第締め切り）
受講料　病院建築（2日）：40,000円
福祉建築（1日）：20,000円
申込み　郵便かFAXにて、所要事項と受講講座名を記入して下記へ。
㈳日本医療福祉建築協会事務局
〒108-0014　東京都港区芝5-26-20
TEL03-3453-9904
FAX03-3453-7573
■病院建築基礎講座2007
●基礎（7月10日）10：00～16：30
・全体計画/山下哲郎（名古屋大学）
・病棟の計画/竹宮健司（首都大学）
・供給部の計画/中野　明（京都女子大学）
・情報システムの計画/宇田　淳（広島国際大学）
●応用（7月11日）9：30～16：30
・病院の施設基準/群　明宏（鹿島建設）
・外来部の計画/小林健一（国立保健医療科学院）
・診療部の計画/井上智史（山下設計）
・精神病院の計画/筧　淳夫（国立保健医療科学院）
・病院のデザイン/藤記　真（日建設計）
■福祉建築基礎講座
・高齢期の住まいの全体像/井上由起子（国立保健医療科学院）
・高齢者施設の基準/菅野正広（かん一級建築士事務所）
・中重度者向け住まいの計画～介護保険施設・グループホーム・特定施設～/石井　敏（東北工業大学）
・軽度者向け住まいの計画～特定施設でない高齢者住宅・有料老人ホーム・ケアハウスなど～/橋本俊明（株メッセージ）
・高齢者施設のデザイン/中村　勉（建築家）

▶第56回アイカ現代建築セミナー

講　師　ラファエル・モネオ×槇　文彦
テーマ　デザインプロセスについて
■〔東京会場〕
日時　2007年7月10日(火)
18：30～20：30
会場　よみうりホール
東京都千代田区有楽町1-11-1
www.yomiuri-fudosan.co.jp/yomiuri-hall/
定員　1,100名（入場無料）
■〔大阪会場〕
日時　2007年7月12日(木)　18：30～20：30
会場　NHK大阪ホール
大阪市中央区大手前4-1-20
www.nhk-osakahall.jp
定員　965名　入場無料
締切　2007年6月20日(水)　18：00まで
申込み方法：ホームページで応募フォームの欄に参加希望会場、氏名、年齢、勤務先住所、勤務先名、電話番号、メールアドレス等を明記の上、申し込む。申込み多数の場合は抽選とし、招待券の発送を持って通知する。
■ラファエル・モネオ：1937年スペイン生まれ。1961年ETSAMマドリッド建築大学で建築学位を取得。代表作は「国立古代ローマ博物館」「セヴィリア空港ターミナル」「ウエスカ自然芸術センター」等
■槇　文彦：1928年東京生まれ。1952年東京大学工学部建築学科卒業。1954年ハーバード大学修士課程終了。代表作は「ヒルサイドテラス」「幕張メッセ」「テレビ朝日」「ワシントン大学サム・フォックス・アート・センター」等

▶「<旧乾邸>活用応援倶楽部」

神戸・六甲山麓に建つ「旧乾邸」。この名建築をなんとか保存活用したいという思いを共有する人々により「<旧乾邸>活用応援倶楽部」が結成され、町と建築の保存活用が大切であることを社会にアピールする活動を続けている。2005年以来、連続講座「名建築でまなぶ六甲山麓の文化」を企画し「真珠物語」「原田の森」や旧乾邸においては、挿花茶会と講演会「六甲晩秋」、講演とシンポジウム「町の遺産を生かす」等を催している。第8回連続講座（6月9日開催）は、「石垣」に着目して阪神間の住宅地の景観、そこで培われた洋菓子やお好み焼の店などを幅広く研究する三宅正弘氏(武庫川女子大学准教授)に、「石」から見た阪神間住宅地の景観の話を聞き、会場となる<旧乾邸>周辺の石垣を見学する。

▶ミュージアム見学会

「京都国際マンガミュージアム」、「京都市学校歴史博物館」、「細見美術館」を楽しむ。
・日　　時：2007年7月8日(日)
・集合場所：京都地下鉄烏丸御池駅北改札口
・集合時間：10：00
・定　　員：20名
・参 加 費：一般2,000円、会員1,500円
・問 合 せ：企業ミュージアムの協会事務局
TEL　06-6872-0969

理事会

第1回常任理事会

4月25日（水）16：00～17：30
出席者　佐野会長ほか6名
議　事（1）平成18年度収支決算見込み
（2）常設委員会委員の委嘱
（3）後援名義等の使用承諾
（4）その他報告事項

編集委員会

第1回編集委員会

4月11日（水）18：00～19：45
出席者　設楽委員長ほか6名
議　事（1）4月号90周年記念号「この10年、これからの10年」特集経過報告
（2）5月号「あそび 考」特集経過報告
（3）6月号「こだわりが創る住まいのカタチ」特集経過報告
（4）7月号「住まいの設備と空間の移り変わり」特集経過報告
（5）8月号「建築系雑誌が伝えるもの」特集経過報告
（6）9月号以降の特集企画
（7）作品作風、広告企画からの報告
（8）収支状況報告

第1回計画系分科会

4月17日（火）19：00～20：30
出席者　三宅幹事ほか4名
議　事（1）2007年5月号「あそび 考」特集の経過報告
（2）2007年度計画系分科会の体制
（3）次の計画系特集のテーマ

第1回建築計画系分科会

4月18日（水）19：00～21：30
出席者　荒木幹事ほか5名
議　事　2007年8月号特集「建築系雑誌が伝えるもの」

第1回構造分科会

4月6日（金）18：00～20：10
出席者　中塚幹事ほか3名
議　事（1）19年度構造分科会体制
（2）「構造の頁」の企画
（3）情報交換
（4）12月号構造特集の企画

第1回設備分科会

4月4日（水）18：00～19：30
出席者　赤澤幹事ほか4名
議　事（1）「設備の頁」の企画
（2）“測定機器シリーズ”頁の企画
（3）2007年7月号「住まいの設備と空間の移り変わり」特集経過報告

第1回施工材料分科会

4月3日（火）17：00～18：00
出席者　藤丸幹事ほか5名
議　事（1）新委員の紹介
（2）特集テーマについて
（3）その他

第1回法令分科会

4月11日（水）15：00～17：00
出席者　片岡幹事ほか6名
議　事（1）法令分科会の体制
（2）「法令コーナー」の企画
（3）9月号法令特集の企画の件
（4）情報交換

第1回作品作風小委員会

4月23日（月）19：00～20：00
出席者　井上副委員長ほか5名
議　事（1）作品の選定
（2）作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
（3）「gallery」掲載報告・予定
（4）前回の編集委員会の報告
（5）その他

第1回広告企画小委員会

4月11日（水）17：00～18：00
出席者　設楽委員長ほか3名
議　事（1）新年度広告企画小委員会の体制
（2）4月号90周年記念号「この10年、これからの10年」特集経過報告
（3）5月号「あそび 考」特集経過報告
（4）6月号「こだわりが創る住まいのカタチ」特集経過報告
（5）7月号「住まいの設備と空間の移り変わり」特集経過報告
（6）8月号「建築系雑誌が伝えるもの」特集の企画
（7）単発広告企画頁のテーマとその具体化
（8）広告掲載状況
（9）収支状況報告

第1回10年委員会

4月16日（月）19：00～20：00
出席者　前川副委員長ほか2名
議　事　今後の活動方針

読者と選ぶ「建築と社会」賞 本審査会

4月13日（金）14：00～17：00
出席者　井上豊審査委員長、徳矢典子・柏木浩一・鈴木克彦委員
議　事　第6回読者と選ぶ「建築と社会」賞の選考

出版委員会

第1回出版委員会

4月19日（木）18：00～19：00
出席者　上原委員長ほか10名
議　事（1）〈プロのノウハウ〉と特装本の経過報告
（2）進行中のテーマについて3件
（3）その他

事業委員会

第1回情報見学小委員会

4月12日（木）18：00～19：00
出席者　瀬戸川委員長ほか10名
議　事（1）今年度事業案件について3件
（2）その他

入会者（敬称略）

〔個人正会員〕
織田　容子（大阪市計画調整局）
野口　　新（㈱野口建築事務所）
林　　新一（㈳日本建築協会）
藤原　光博（大阪市計画調整局）
〔団体会員〕
㈱ウッドフレンズ

●訃報

〔個人正会員〕
嶋田 勝次氏
平成19年3月16日他界 享年75歳

多彩な建築に先進技術で応える、建材の総合メーカー。



塗装鋼板

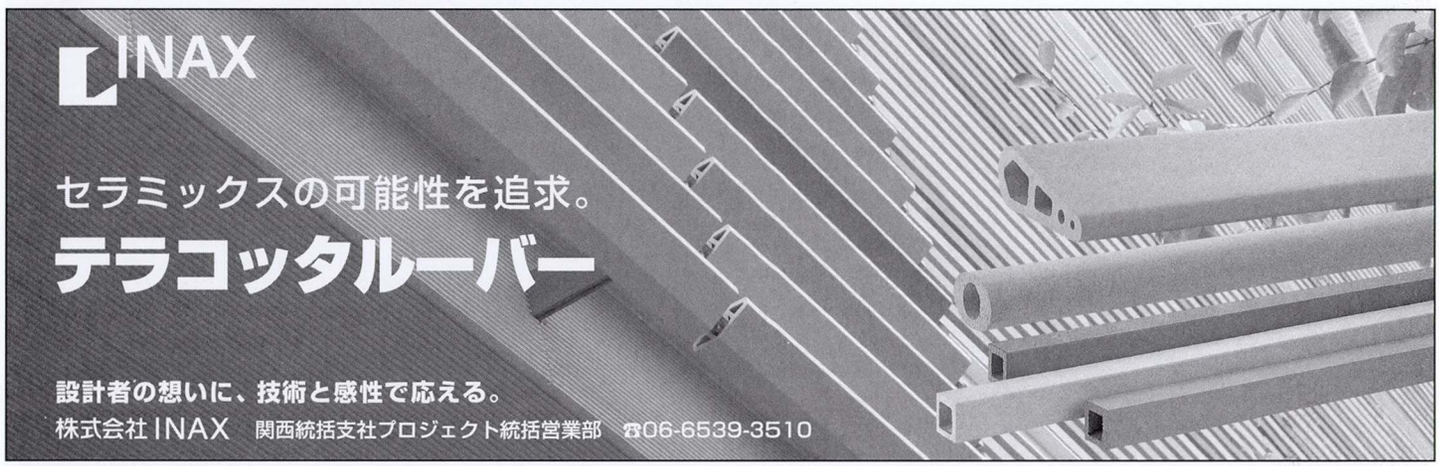
タイマフロンGL
耐摩カラーGL
スーパーサンフロンGL
エスフロン遮熱GL

パネル建材

イソバンド・イソダッハ
防火・耐火 エスガード

NISC（ニスク）とお呼び下さい!!
日鉄住金鋼板株式会社
ホームページアドレス　http://www.nisc-s.co.jp/

本　　社 〒103-0027 東京都中央区日本橋2-7-9 大手町建物日本橋ビル　TEL 03-3548-6420（代）FAX 03-3548-6498
大阪支社 〒530-0005 大阪府大阪市北区中之島3-2-4 大阪朝日ビル　TEL 06-6228-8330（代）FAX 06-6228-8506
支店/東北・名古屋・九州　　営業所/札幌・北陸・中国



LINAX

セラミックスの可能性を追求。
テラコッタルーバー

設計者の想いに、技術と感性で応える。
株式会社INAX　関西統括支社プロジェクト統括営業部　☎06-6539-3510



写真セット希望小売価格 ¥786,700（税込¥826,035） 間口 2000mm

やります「生活環境企業」。
TOTO

マーブライトカウンター
スタンダードシリーズ・ボウル一体タイプ 新登場

マーブライトカウンター スタンダードシリーズにボウル一体タイプが登場しました。
省スペース対応なので、リモデルにも最適です。

今までにない ボウル一体カウンター	省スペース設計が可能です	豊富なカラーバリエーション
一体成形の際立つデザイン	間口590mm～3150mm対応	空間に合わせ組み合わせ自在

商品の技術的なお問い合わせは、TOTOナビダイヤル
FAX.0570-01-2111　TEL.0570-01-1010
受付時間〈平日〉9:00～18:00 〈土・日・祝日〉10:00～18:00（夏期休暇・年末年始を除く）
ホームページ専門家コーナー　www.com-et.com

まいにちにユニバーサルデザインをTOTO

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59 電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

OKUJU
Space Creator
クオリティ＆コストパフォーマンス
ALTsシステム
スナップ工法
SP-600
メタルシステム天井
内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社オクジュー
本　社
大阪市北区西天満5丁目3番7号　〒530-0047
TEL(06)6312-4131　FAX(06)6312-7998
東京・九州・南九州・名古屋・上海

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工
ダイダン株式会社
本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見２丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

CHOYO
人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。
電気設備設計施工
朝陽電気株式会社
代表取締役　山本貴士
本　社　〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目2-4(朝日ビル)
TEL 06(6385)1361(代)　FAX 06(6385)1050

www.naniwa.com
We have hope
■印刷事業 ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、雑誌、文字、画像データ処理
■メディア事業 SPプランニング・コンサルティング、ITソリューション、web及びメディアコンテンツ企画制作、
株式会社NPCコーポレーション
本　社　〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel:(06)6351-7271(代) fax:(06)6352-7479
第二ビル　〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel:(06)6351-0128(代) fax:(06)6351-0208
東京支社　〒105-0004 東京都港区新橋6-17-2
tel:(03)3433-5211(代) fax:(03)5776-7733
(旧社名ナニワ印刷㈱、日本データネット㈱)

地球環境を守り、100年建築に貢献する
NACL のアルミ表面処理
株式会社日本電気化学工業所
http://nacl.jp　E-mail:sc@nacl.co.jp
本部営業部　〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所　〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目7-2 東京NACLビル
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・京丹後（0772）72－2220
舞　鶴（0773）76－0133

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332－6861
TEL 東京（03）3272－8501

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443－6181

光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）6252－6000

東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83－2381
TEL　　大阪（06）6877－1581

日本建築協会企画・販売

出版図書一覧

1917年3月に創設された日本建築協会（当時・関西建築協会）は、すでに昭和初期には大阪近辺で住宅博覧会や建築講演会を開く一方、当時は入手しにくかった建築の情報を図書の出版という形で会員に提供していた。

＊

以後、創立周年記念事業として、その時代の動きをとらえて単行本を出版している。

50周年、60周年、70周年、そして80周年に、図書の出版が企画され、現在も継続して発行・販売されている出版物は、以下のとおり。

＊

購入希望者は、㈱日本建築協会事務局（TEL06―6946―6981、FAX06―6946―6984）まで。

日本建築協会創立70周年記念出版

住宅近代化への歩みと日本建築協会 1988年

A４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会創立75周年記念出版

工高生デザインコンクール入選作品集 1992年

A４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格2,000円

昭和生まれ　関西の建築家50 1987年

A４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会建築クラブ朝食会300回記念講演記録集

講演記録集 **話のはなし** 1997年

B６判５分冊　企画：日本建築協会建築クラブ　頒布価格2,500円（税・送料込み）

民間（旧四会）連合協定

工事請負契約約款（平成19年６月改訂）

工事請負契約書・仲裁合意書・契約書使用上の留意事項

頒布単位：２部１単位とする

価　　格：１部700円（税込）送料　実費

日本建築協会事務局（06-6946-6981）で頒布

日本建築協会創立60周年記念事業

建築技術選書

企画：日本建築協会
発行：学芸出版社

A５判・130頁～160頁　本体価格￥1,200～￥1,400

各冊￥100割引頒布中〈日本建築協会事務局（06-6946-6981）にて〉

- 3 マイコンによる構造設計のすすめ（改訂版）　魚木晴夫
- 19 住宅設計とインテリア　福岡喜久雄
- 24 鉄骨構造の話　金多潔・甲津功夫・西沢英和
- 27 建築積算業務　生島道道
- 28 建築金物の知識　立野一郎

日本建築協会創立60周年記念事業「建築技術選書」姉妹篇・四六判２色刷イラスト入

〈プロのノウハウ〉シリーズ

企画：日本建築協会　発行：学芸出版社　本体価格￥1,600～￥2,500

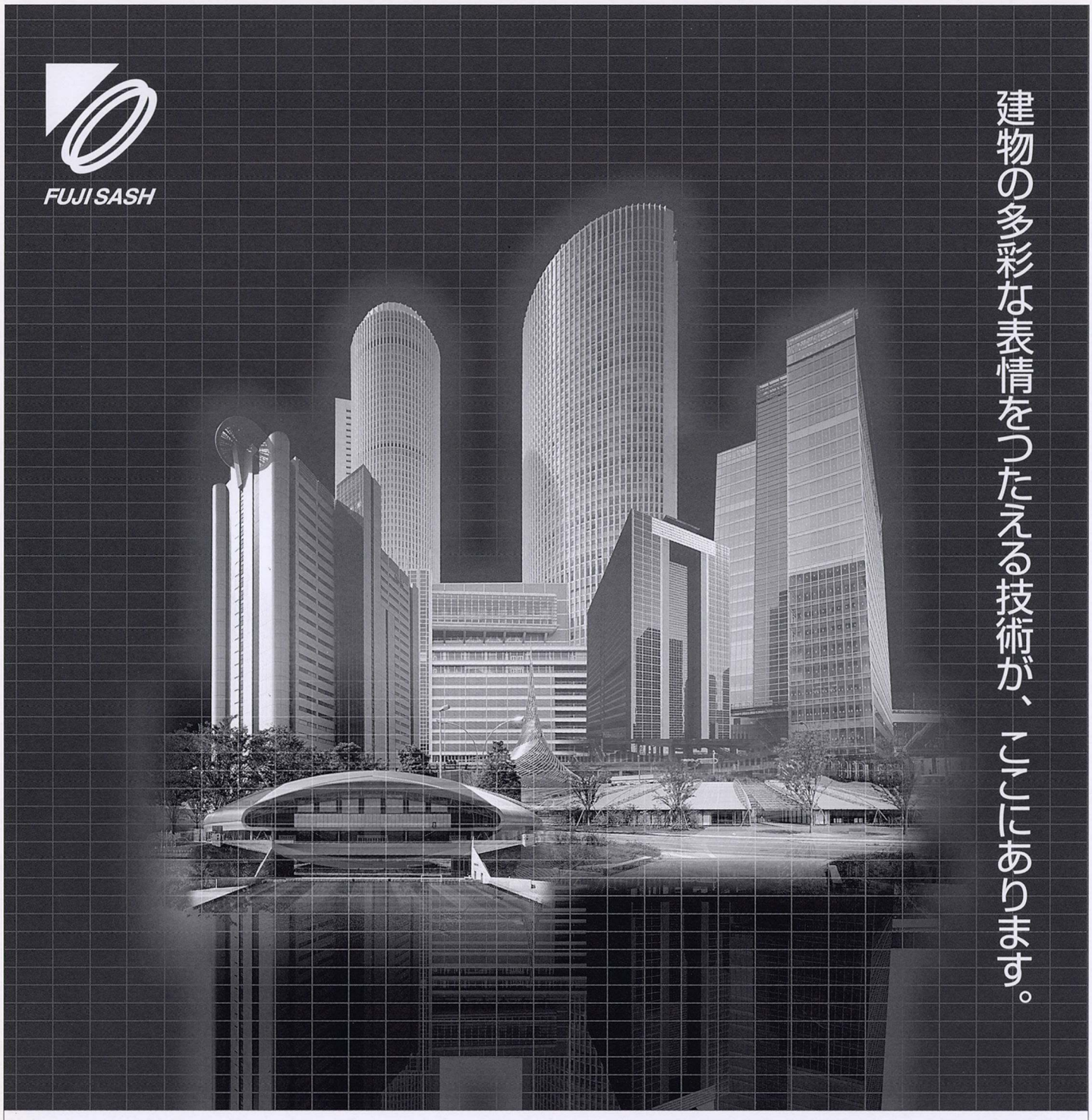
- 躯体工事監理のチェックポイント100　須賀好富
- 空調設備のトラブル50　建築設備トラブル研究会
- 衛生設備のトラブル50　建築設備トラブル研究会
- 鉄筋工事・本音の現場学　荒川治徳
- 建築基準法の難解条文を読みこなすコツ　高木任之
- 建築と音のトラブル　中川清ほか
- 木造住宅監理の話　山田　修
- 環境と共生する建築25のキーワード　大西正宜
- 鉄骨工事の現場学　石田満商
- 仕上工事監理のチェックポイント　日建設計監理業務研究会
- 木造住宅のしくみ　在来工法の基本と応用　浅野平八・東　敏博
- コンクリート工事のチェックポイント100〈新版〉　加賀秀治
- インテリアコーディネートの100ポイント　町田ひろ子監修／松本　茂・村元俊子著
- 木づくりの常識非常識　上村　武
- 建築トラブルにみる常識非常識　荒川治徳
- 建築関連法規を読みこなすコツ　高木任之
- 徹底解説〈大改正〉建築基準法　高木任之
- 建築の現場管理システム　伊東貞夫
- 新版建築物の消防法を読みこなすコツ　高木任之
- 新版コンクリート工事のチェックポイント100　加賀秀治
- 建築基準法の性能規定を読みこなすコツ　高木任之
- 新版　都市計画法を読みこなすコツ　高木任之
- 新版　建築基準法を読みこなすコツ　高木任之
- 建築工事の祭式　「建築工事の祭式」編集委員会
- 飛躍する構造デザイン　渡辺邦夫
- 改訂版　都市計画法を読みこなすコツ　高木任之
- 改訂版　建築基準法を読みこなすコツ　高木任之
- 改訂版　建築物の消防法を読みこなすコツ　高木任之
- プロが教えるキッチン設計のコツ　井上まるみ

日本建築協会創立70周年記念事業・B5判

選書特装版

企画・日本建築協会　発行・学芸出版社　本体価格￥2,800～￥3,800

- 水にまつわるトラブルの事例・解決策〈建築篇〉　「建築漏水」編集委員会
- 水にまつわるトラブルの事例・解決策〈設備篇〉　「設備漏水」編集委員会
- 建物の汚れ－トラブル事例と解決策　「建物の汚れ」編集委員会
- 建築デザインのための構造計画　須賀好富
- 入門・建築積算　生島道春
- 建物の結露－トラブル事例と解決策　「建物の結露」編集委員会



アルミニウム、コンクリート、ガラス、石、タイル…。さまざまな素材の競演が生み出す多彩な表情と色彩の微妙なコントラストが、ビルの外壁を彩り、都市の空間を豊かに演出します。不二サッシは、建築外装の総合メーカーとして、このようなデザインを支えるためのさまざまな技術開発やディテールへのこだわりを通して、快適な都市景観の創造に貢献します。

不二サッシ株式会社

大阪支店　〒540-0047 大阪市中央区淡路町3-5-13　TEL.06-4706-4134
東京本部
〒141-0032 東京都品川区大崎5-6-2（都五反田ビル）TEL.03-5745-1253
http://www.fujisash.co.jp/

窓から夢をひろげていきます
不二サッシ

建築と社会　2007.06　Vol.88 No.1023

社団法人 日本建築協会　〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31　電話：06-6946-6981　FAX：06-6946-6984　http://www.aaj.or.jp

毎月1回1日発行　昭和24年3月19日第3種郵便物認可　ISSN 0912-8182

定価 1,200円（税込）

正会員の講読料は会費に含めて徴収

雑誌　03379-6